

学報

NARA MEDICAL UNIVERSITY

vol. **72** 2020
May

Special Feature

理事長・学長からの
メッセージ vol.15

令和元年度 卒業式



Contents

特集

理事長・学長からのメッセージ vol.15	3
令和元年度 卒業式	4
令和2年度 入学式	6
退任の挨拶	7
就任の挨拶	8
2019年度 海外リサーチ・クラークシップ報告	10
令和2年度 公立大学法人奈良県立医科大学予算	12
未来への飛躍基金だより	14
本学の新型コロナウイルス感染症対策について	15
A病棟改修工事が一部完成しました	15
看護部の紹介	16
図書館だより	18
MBT 研究所だより (第16報)	19
安全保障輸出管理制度がスタートしました	20

Campus News

外国人医師の研修を行いました	22
近畿建築祭奈良大会でMBTの取組みをアピールしました	22
橿原ロータリークラブ講演会でMBTを講演しました	22
ドイツの学生(4名)の臨床実習を行いました	23
平城宮跡歴史公園スマートチャレンジシンポジウムでMBTを講演しました	23
柿の葉ずし総本家平宗奈良店でMBTを講演しました	23
万博に向けてMBTの取組みについて	24
白檀生祭におけるチャリティ募金の寄附について	24
北海道更別村でMBTの取組みをアピールしました	24
安全保障輸出管理説明会を開催しました	24
FD・SD 講演会を開催しました	25
テキサス大学ヘルスサンアントニオ校からバーマ教授、マカハラジ准教授が来学されました	25
研究不正防止研修会を開催しました	25
第10回大和漢方医学薬学セミナーを開催しました	26
MBTで新型コロナウイルスへの取組を検討	26
次世代住宅シンポジウムでMBTを講演しました	26
同志社女子大学と共催でロビーコンサートを開催しました	26
今井町にてMBT健康教室を開催しています	27
北海道沼田町でMBT健康モニター報告会を行いました	27
MBTによる看護・介護の負担軽減に向けた実証実験を開始	27
日本国際博覧会協会小林上席審議役がMBT研究所を訪問されました	27
V-iCliniX 講座国際シンポジウムを開催しました	28
附属病院ボランティア発足20周年記念式典	29
和歌山県立医科大学と知的財産に関する意見交換会を行いました	29
本学知的財産戦略の意見交換会を開催しました	29
知的財産勉強会を開催しました	30
奈良先端大との共同研究助成事業成果報告会を開催しました	30
健康長寿大規模コホート研究進捗状況報告会の開催	30
大阪西梅田のMBTサテライト拠点の展開について	30

Winner Report

第29回日本呼吸ケアリハビリテーション学会で医療の質特別賞-疾病管理領域-を受賞しました	31
第36回国際心臓研究学会日本部会でBest Presentation Awardを受賞しました	31
第226回日本内科学会近畿地方会で医学生奨励賞(優秀演題賞)を受賞しました	31
日本内科学会近畿地方会で医学生奨励賞を受賞しました	31
第226回日本内科学会近畿地方会で若手奨励賞(優秀演題賞)を受賞しました	32
東京生化学研究会2019年度研究助成を受賞しました	32
第39回アルコール医学生物研究会学術集会におきまして優秀演題賞を受賞しました	32
サノフィ株式会社グローバル公募式大型研究助成を獲得しました	33
令和元年度FD活動表彰式を行いました	33
令和元年度TBL Best Teacher表彰式を行いました	33
上原記念生命科学財団2019年度研究奨励金を受賞しました	33
2019年度 学位授与の状況	34
協定大学共同研究助成事業 助成者決定	35

Information

寄附者ご芳名

令和2年度入試結果	35
「未来への飛躍基金」にご協力いただきありがとうございました	35
メディア掲載情報/編集後記	36

理事長・学長からのメッセージ vol.15

理事長・学長 細井裕司

私は、奈良医大が「主たる大学」として存続することはもちろん、日本を代表する特別な医科大学になる決意を持って大学運営を行います。

はじめに

卒業生の皆さん、「ご卒業おめでとうございます」。新入生の皆さん、「ご入学おめでとうございます」。新しく本学の一員となられた職員の方々に、「新しい力に大きな期待を抱いております」。

私は、当大学を、教育、研究、診療で超一流の医科大学にするだけでなく、医学の力を産業に投入する活動（本学発祥の MBT 構想）によってイノベーションを起こし、それによって本学を、日本を牽引する特別な医科大学にしたいと思っています。

「新型コロナウイルス感染症対策本部」の設置

新型コロナウイルスに全学が一致して取り組むために、理事長・学長を本部長とする「新型コロナウイルス感染症対策本部」を4月1日に設立いたしました。対策本部の中に、「病院部会」、「教育研究部会」などの新型コロナウイルスに対して奈良医大を防御する部会だけでなく、新型コロナウイルスに対する対策を世界に提言・発信するための「先端研究部会」、「記録部会（NHK との共同事業）」を設置いたしました。患者の受け入れなど、すでに多くの教職員の方々が、献身的に取り組んでいただいておりますことに感謝申し上げます。

先端研究部会につきましては、感染症に対する以前の取り組みの成果を発展させるだけでなく、新型コロナウイルスに対する新たな研究に着手しております。奈良医大は11年前にMBTの前身である「住居医学講座（寄附講座）」で、大和ハウス、大和リースとともに「プレハブ発熱外来診察室」を開発しており、今回の新型コロナウイルスの対策として、全国的にも注目を集めています。このように感染症分野においても、奈良医大は世界に貢献できる大きな能力を有していると考えています。記録部会は、NHKと共同でこの未曾有の感染症に対する奈良医大の戦いを記録することによって、後に医学的検証を行い、後世に伝えます。NHKは、NHKスペシャルやクローズアップ現代+などで奈良医大の活動を紹介する予定です。

けいはんなリサーチコンプレックス（RC）が最高評価獲得：報告と御礼

私がオーガナイザ（マネージメントの長）として参画していた「けいはんなRC」事業（1拠点あたり5～7億円/年度の支援規模）が、2016年10月から約3年半続いた活動を終えました。このRC事業は、文科省所管の国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）の採択を受けて全国3カ所で実施されている事業の1つです。他の2カ所は神戸市等（中枢機関：理化学研究所）と川崎市等（中枢機関：慶應義塾大学）です。この度JSTの最終評価が行われ、けいはんなRC事業は他の2カ所より上位の最高の評価をいただくことができました（https://www.jst.go.jp/rc/result_h31_shiryou3.html 参照）。このような成果が得られましたのも、本事業に参加された東大、京大、本学をはじめ大学や研究所、そしてサントリーやパナソニックなどの企業、その他多くの関係者の方々の努力の賜と深く感謝申し上げます。

本事業では、けいはんな地域が強みとするi-Brain（脳・人間科学技術）とICT（情報通信技術）をコア技術として、数々の革新的な事業やサービスが生み出され、「超快適」スマート社会創出の礎を築きました。この成果は国内外377の機関と連携協力関係を築く原動力となり、中でも、イスラエルのイノベーション庁とカナダ国立研究機関と結んだ覚書に基づいて、両国との共同プロジェクトが動き出しています。

またこの事業は、本学のMBTにも受け継がれることになっています。今後ますますの本学の発展に向けて、引き続き皆様のご協力とご支援をよろしくお願い申し上げます。

病院長及び医学部長交代の御報告

古家仁先生には8年間、附属病院長として、また車谷典男先生には6年間、医学部長として、本学の発展に寄与していただきました。この場をお借りして深謝申し上げます。両先生方の後任として、新しい先生方にバトンを引き継いでいただくことになりました。4月1日から、新医学部長は嶋緑倫先生、新附属病院長は吉川公彦先生の布陣で、前任者が築かれた土台の上に、本学をさらに発展させていただきたいと思っています。よろしくお願い申し上げます。

令和元年度 卒業式

式辞

学長 細井 裕司

今日のおき日、奈良県立医科大学医学科を卒業する105名、看護学科を卒業する84名の皆さん、ご卒業おめでとうございます。皆さんが小学校入学以来の長い学生生活を修了され、ここに学士(医学)、学士(看護学)の学位を得られましたことは誠にめでたく、心からお祝い申し上げます。

これは、何よりも皆さんの弛まぬ努力の結果であります。と同時に、今日まで皆さんを慈しみ育ててこられた保護者の皆様方や、皆さんにご指導くださった先生方ならびに関係する皆様のお陰でもあります。このことに感謝の気持ちを持ち、次のステージへと進んでいただきたいと思います。

奈良医大も同様で、教育、研究、診療において高いレベルを持った医科大学として存立することができているのは奈良医大単独の力ではなく、多くの人や組織に支えられているおかげです。特に荒井知事はじめ県の皆様方には、奈良医大の発展に大きな力をいただいております。感謝申し上げます。

2014年に奈良医大の将来像策定会議が始まり、2017年には「奈良県立医科大学の将来像」が完成しました。この過程において、建学の精神、シンボルマーク、教育・研究・診療・法人運営の理念と方針が決定されています。また、2024年には、新キャンパスがオープンする予定です。今後ますますの大学の発展を期待したいと思います。



例年と異なった卒業式

さて、本日の卒業式は、新型コロナウイルスの影響によって来賓の皆さまや親族の方々の参加が制限され、皆さんが想像されていた卒業式とは大きく異なるものになったと思います。残念なことではありますが、皆さんにはこの事態を逆にチャンスと捉え、考えたり学んだりしてほしいと思います。

私は物事は三つの要素で決まると考えています。一つは何か正しいか、二つ目はそのことが自分にとって損か得か、三つ目は何が当たり前かということです。当たり前が変わったとき、何を考え、どのように対処するかによってその人の人生の豊かさが決まるといえるでしょう。

6年前に私が学長になったとき、当時のオープンキャンパスの事務担当者が「今年のオープンキャンパスも昨年同様に行ってもよろしいか」と許可を求めてきました。私は、その担当者に「なぜオープンキャンパスを行うのか。奈良医大におけるオープンキャンパスの目的は何か」を尋ねました。担当者は、大変困った顔をして「毎年行っていますから、他学も行っていますから。」と答えました。これは、先程挙げた三つの要素のうち、何が正しいかではなく、何が当たり前かによってものごとが進められる例です。目的や効果を考えなかったために、多くの無駄が生じているにもかかわらず、当たり前が優先されてきたのです。このオープンキャンパスについては、その後、目的を医学科と看護学科において明確にし、関係者の努力によってより合理的な現在の形で行われることになりました。

外的要因が加わると 何が当たり前かは急速に変わる

しかし、正しいことを実行するに当たって、当たり前を打破することが時として困難なことがあります。新型コロナウイルスの拡散は極めて不幸な出来事ですが、このような強い外的要因が加わったときこそ、当たり前を打破できるチャンスでもあるといえるでしょう。

今回の騒動で、ある大企業が8000人の社員に在宅勤務を命じました。当然、この外的要因が排除されると社員は通勤を伴う通常勤務に戻るものと思っているでしょう。しかし、業務のうちの何割かは在宅で十分できる事がわかるのではないのでしょうか。業務の効率化、ワークライフバランス、地球環境、などを考えると在宅でできることは在宅で行うということになり、通勤の当たり前が変わるかも知れません。

この卒業式についても、同じことがいえます。保護者の方々や教職員と共に卒業の喜びを分かち合いたいのはもちろんのことです。しかし、昨年、一昨年の10年前から連続と受け継がれてきた「当たりの」卒業式が一番正しい形態かどうかを考える良い機会になるのではないかと考えています。

新型コロナウイルスによって、卒業式が突如「当たりの」の卒業式ではなくなりました。皆さん方の人生においても当たり前が突如崩れることが必ずあります。それを乗り越えなければなりません。乗り越えるための準備をしておかなければなりません。



人生における準備

何が起るかわからないことに対してどのような準備をしておくべきなのでしょう。それは、困った時にお互いに助け合える友人を持つことです。そして、常に母校奈良医大との関係を保ち、一生母校を利用することです。

それは、大学にとっても同じことです。この卒業式はインターネット上で同時中継されていますが、保護者や教職員の方々にも遠隔参加していただけるこの環境はごく短期間の間につくられました。それは、奈良医大と共に歩んでいるMBT コンソーシアムの通信部会の協力があったからです。MBT (Medicine-Based Town) 「医学を基礎とするまちづくり」とは、奈良医大発祥の「医学の力を企業活動など社会に生かす」構想です。16年の時を経て、現在あらゆる業種から100社以上の有力企業が本学のもとにコンソーシアムを形成している世界に類例がない活動であり、現在急速に全国に広がっています。そして、これら有力企業のネットワークのもとに、単なる単科大学を超える活動が可能になりました。

これからの皆さんの人生も山あり、谷ありでしょう。しかし何も心配することはありません。皆さんが奈良医大で学んだことが大きな武器となって必ず乗り越えることができます。それだけではなく、全国組織を持つ母校奈良医大が皆さんの一生を支えます。困った事があればいつでも母校奈良医大を頼ってください。

本日はおめでとうございました。



令和元年度卒業式は新型コロナウイルス感染拡大防止のため卒業生のみのお出席で挙行し、式の様子をインターネット配信いたしました。

新たな旅立ち (医学部卒業式 大学院修了式 令和2年3月16日)

今年も259名の若き俊英が旅立ちました。本学のみならず、広く日本、そして世界の医療・医学の向上に大きく貢献してくれることでしょう。(259名：医学部105名、看護学部84名、大学院医学研究科博士課程49名、同修士課程10名、看護学研究科修士課程11名)

また、式の中で、次の賞の受賞者が発表されました。(敬称略)

◆奈良県立医科大学学長賞

医学部6年間または看護学部4年間の課程で最も優秀な成績を収めた者

医学部：^{かさほら けんや}笠原 健矢

看護学部：^{びんご あやの}備後 綾乃

◆医学部同窓会厳糧賞、看護学部同窓会華糧賞

①クラスのリーダーとして顕著な活躍をした者 (ヒーローオブザクラス)

②ボランティア活動などで社会に特に顕著な功績があった者

③クラブ活動など課外活動で特に優秀な成績をあげた者

厳糧賞：^{しなと たかし ふじもと かな}階戸 尊、藤本 華奈

華糧賞：^{はなかし あべ あやの まつお ともみ}阿部 彩乃、松尾 朋美

学長賞受賞者

医学部 笠原 健矢

この度は学長賞という名誉ある賞をいただき、大変光栄に存じます。私は高校までずっと京都の学校に通っていたため、奈良の大学に入学した時は不安で満たされていました。しかし、部活の優しい先輩方や頼もしい同級生に恵まれ、安心した6年間を過ごすことができました。

試験の量も多くはありましたが、勉学以外でも、同級生と気持ちを分かち合い、合気道部では武の志や体力を身につけ、精神と肉体ともに常に成熟した状態で向き合う事ができました。

これも一重に、このような環境を用意して下さった先生方を始め、私自身の家族、共に学び合った同級生、先輩・後輩のお陰であると実感しております。心より御礼申し上げます。

4月からは研修医として更に医療に精進していく所存です。変わらぬ御指導・御鞭撻の程よろしくお願い致します。



看護学部 備後 綾乃

この度は学長賞という名誉ある賞を頂き、大変光栄に存じます。

思い返すと、あっという間の4年間でした。授業、部活動、アルバイト等の両立はとても大変であり、心が折れそうになるときもありました。また、実習では思い通りの看護ができず、日々もどかしさを感じていました。そのような日々を送る中でこのよう



な賞を頂けるに至ったのには、教職員の方々をはじめ、学校関係者の方々、先輩方、友人、そして家族等のご支援があったからだと思えます。この場をお借りして改めて心より感謝申し上げます。

4月からは保健師として新たな一歩を踏み出します。このような賞に恥じない社会人になれるよう、これからも精進して参りたいと思えます。今後とも、温かく見守って頂けると幸いです。

令和2年度 入学式

式辞

学長 細井 裕司

今日、春爛漫の良き日に医学部医学科113名、同2年次編入学生1名、医学部看護学科85名、合計199名の晴れやかな入学生の皆さんを奈良県立医科大学に迎えることができますのは、私どもの大きな喜びとするところであり、入学生の皆さんに対し心から「おめでとう」と申し上げるとともに、大学を代表して歓迎の意を表します。

また、入学する学生を今まで慈しみ、支え、育ててこられた、ご両親やご家族の皆様に対して心からお慶びを申し上げます。

本来であれば、入学生の皆さん、保護者の皆様、そして来賓の方々をこの場にお招きして式典を挙げる所ではございますが、今日は、新型コロナウイルス感染症の対策で、皆様方の安全を最優先するため、教職員、同窓会長様のみで挙行し、その模様をインターネット配信させていただいています。

ご多忙の中御臨席いただきました、

奈良県立医科大学医学部医学科同窓会会長 國分 清和 様
奈良県立医科大学医学部看護学科同窓会会長 植村 信子 様
に厚く御礼を申し上げます。

皆さんは、4年または6年後、10年後、25年後、40年後そして、60年後、それぞれのときに今日のこの日を思い出し、奈良医大に入学し、奈良医大で学んだことが人生にとって本当によかったと思うと私は確信しています。4年または6年後は卒業のとき、10年後は、医師や看護師として少し自信が出てきたとき、25年後は医師や看護師として自信に満ち溢れるようになったとき、40年後は還暦の時、60年後は人生を振り返るときです。

なぜ私がそのように確信しているのかの話をししましょう。その最大の理由は、私自身が他の大学ではなく、奈良医大に入学して本当によかったと思っているからです、客観的な理由についてお話ししたいと思います。

まず第1に、荒井知事をはじめ、奈良県が医療に極めて熱心なことが挙げられます。2018年5月には奈良医大附属奈良病院をルーツとする奈良県総合医療センターが新病院として開院しました。2024年には現キャンパスの場所から1kmほど離れたところに新キャンパスが開設されます。その後も現キャンパスのリニューアルが計画されています。

2つ目は、皆さん方の先輩の多くが卒業後に奈良医大や奈良県の病院に就職していることです。医学科においては、現在の医師臨床研修制度による募集定員の「定員充足率」がその大学や県で研修する医師が多いか少ないかの目安になります。つまり、先輩がどの病院や県に就職したかの目安になります。今年度の奈良県の医師の定員充足率は全都道府県中第1位、奈良医大の定員充足率も100%で第1位でした。特筆すべきは、2003年度にマッチング制度が始まって以来、どの都道府県で

も100%を達成したことがなかったということです。奈良県が100%を達成した史上初めての県となりました。看護学科においては、医学科のような明確な数字はありませんが、多くの先輩が奈良医大附属病院や奈良県内の病院に就職しています。

3つ目は、本学で行っている様々な取り組みです。本学では、国際性の豊かな医療人の育成のために臨床英語教育に力を入れており、2年生の冬に3ヶ月間Harvard Medical School、University of Michigan Medical Schoolなどでの海外実習を可能とする制度を導入しています。国内においては、現在東京や大阪など全国5カ所に本学のキャンパスを設置しており、橿原のキャンパスに留まらず専門知識を習得したり研究したりすることができます。

また、奈良に軸足を置きながら全国に展開している取り組みとして、本学のMBT活動があります。MBT (Medicine-Based Town) 「医学を基礎とするまちづくり」とは、奈良医大発祥の「医学の力を産業創生など社会に生かす」構想です。16年の時を経て、現在あらゆる業種から100社以上の有力企業が本学のもとに集まり、コンソーシアムを形成しています。これは世界に類例がない活動であり、現在急速に全国に広がっています。そして、これら有力企業のネットワークが、単なる単科大学を超える活力を実現しています。

これらの本学の特徴を生かし、みなさんが有意義な学生生活を送られることを願っています。今回、新型コロナウイルスの影響でこのような形の入学式を挙げる事になり、皆さん方も保護者の方も入学式に出席できなかったことを残念に思われていると思います。私たち教職員も本当に残念です。しかし、人生には予期せぬことが起こるということを新型コロナウイルスは教えてくれました。当たり前の世界に慣れている私たちに「当たり前でないこと」が起こりうることを教えてくれたともいえます。皆さんには、これから本学で学んで、どんな困難なことがあっても克服できるだけの知識と技術そして精神力を身につけていただきたいと思います。奈良医大で何でも果敢に挑戦する人になってください。

今日は本当におめでとうございました。



令和2年度入学式は新型コロナウイルスの状況を踏まえ、入学生の安全を最優先し、入学生の出席を求めず挙行し、式の様子をインターネット配信いたしました。

退任の挨拶



教育・研究担当理事 副学長 医学部長 医学科長 附属図書館長 車谷 典男

公立大学法人の教育・研究担当理事、また奈良県立医科大学の副学長（医学部長）等の役職を、教職員さらには学生の皆さんに支えられて、1期2年を3期、計6年間何とか担当させていただくことができました。思えば、本学に入学して以来、米国留学の一時期を除いて、橿原市四条町840に随分長く通い続けたものです。この間、周囲の風景はゆっくりと、でも確実に変わり続けました。医科大学の社会的使命と、良き医療人の育成を合言葉に、本学が一層発展することを心から願っています。最後に、学生時代からの全ての皆様にあらためて御礼を申し上げ、退任のご挨拶とさせていただきます。



医療担当理事 副学長 附属病院長 古家 仁

この度本学附属病院病院長を退任いたしました。1985年に本学の麻醉科学講座助教授として赴任以来35年間勤めさせていただきました。1995年に麻醉科学講座教授に就任し、その後臨床教育部長、医療安全推進室長、集中治療部長、緩和ケアセンター長などを兼任し、また2012年からは病院長として今回の退任まで8年間勤めました。教育の場では、講義や臨床実習だけでなくクラブ活動の顧問として多いときには4つの顧問を掛け持ちするなど学生さんとも楽しく過ごしました。在任中は麻醉科医として、さらに病院長として医局員はじめ多くの先生方や看護師さん、メディカルスタッフの方々、事務の方々とともに働き、また協力をいただきました。本日に皆様に感謝しております。ありがとうございました。



産婦人科学 教授 小林 浩

令和2年3月末日をもちまして産婦人科学教室の教授を退任することになりました。2005年に浜松医大から着任し15年間、産婦人科業務に携わらせていただきました。この間、奈良県における周産期ネットワークの構築、内視鏡やロボット手術の積極的導入、若手医師の研修の充実、サブスペシャリティの取得促進、関連病院の新規獲得、産学官連携による研究の活性化など充実した日々を送ることができました。今まで教室を支えていただきました産婦人科医会、医師会、同門会、行政の皆様には、これまでいただきましたご厚情に心から厚くお礼申し上げますとともに、本学のさらなるご発展をお祈りいたします。



小児科教授 研究部長 嶋 緑倫

早いもので、この3月末を持ちまして、奈良県立医科大学小児科教室の教授職を退任することになりました。最初の数年間は、急速に増える業務量になかなか慣れず、また教室の新体制の構築に必死でした。しかしながら、教室のスタッフが各々の専門性を生かしながら教室を大いに盛り上げてくれました。その成果もあり、ここ数年間でどんな難治性疾患や重症疾患にも対応できる診療体制を構築することができました。また、在任中に全国的にも最大規模の小児センターやNICU/GCUができたことも大きかったと思います。研究面では抗体製剤の産学共同開発の機会に恵まれ国際的にも発信することができました。大学関連では、研究部長を6年間担当させていただきました。研究推進課や教育支援課の皆様にお助けられながら、また、各委員会の委員の皆様のお熱心な協力に支えられながらなんとかやってこられました。これまで、終始、ご支援いただきました細井学長、古家病院長、車谷医学部長をはじめ、各教室の先生方、看護部や事務の皆様にお礼を申し上げます。



教育開発センター 教授 藤本 眞一

昭和56年に奈良県立医科大学を卒業後、4年間の地域医療機関での勤務、2年の海外での研究生生活を含め約40年間に亘って奈良県立医科大学でお世話になりました。その間、後半の20年間、特に医学教育に関わりました。この度、無事に定年退職の運びとなりますことは、偏に、皆さまのご協力の賜物です。心から感謝申し上げます。

「四書」の一つ「大学」には、「十目の視る所、十手の指す所、其れ厳なる乎」とあります。誰もが認める事、多くの人が正しいとする所は重要であると説く言葉です。医学教育を担当して感じるのも全く同様であり、議論を尽くし、皆の同意を得て進めることが最も重要であると思っています。

長い間、ありがとうございました。今後ともよろしくお願い致します。



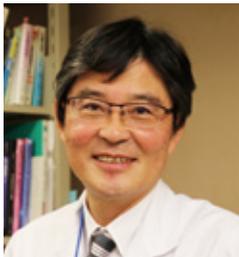
附属病院副院長、看護部長／看護実践・キャリア支援センター長 高橋 美雪

2015年、開学70周年を迎えた春に看護部長に就任し、奈良医科大学、附属病院、看護部の理念のもと、看護部目標のスローガン「継承と変革」～「継承と成長」を掲げて取り組んできました。大学の歴史と共に看護部の歴史があり、先人の想いを繋ぎながら今後も看護部は医療情勢に柔軟に対応しつつ成長していくことと思います。

また、看護実践・キャリア支援センターを中心に看護学科と看護部が協働し、人材育成のための確固たる体制を整えられたことは卒業生（昭和56年卒です）として微力ながら貢献できたのではないかと自負しています。

振り返れば35年の月日を奈良県で過ごし、数えきれないほどの多くの方々を支えられてきました。そのご縁に感謝しながら出雲（島根県）の地で看護に携わっていかうと思っています。

就任の挨拶



教育・研究担当理事 副学長 医学部長 医学科長 附属図書館長 嶋 緑倫

この度、医学部長の職を拝命いたしました。長年にわたってご尽力された車谷先生の後任ということで責任は重大ですが、奈良医大の教育や研究の益々の発展のために努力する所存です。医学教育については日進月歩の医学の進歩に対応できるように、良き医療人としてのマインドを醸成できるように、そして学生が高いモチベーションを持って取り組める教育を目標に先生方と一緒に考えてチャレンジしていきたいと思っております。研究面では、奈良医大全体の研究力をワンランクもツーランクもレベルアップすることを目標に、各研究領域のニーズをしっかりと踏まえて研究環境や支援体制を整備していきたいと思っております。皆様のご支援をいただきますことを心よりお願い申し上げます。



医療担当理事 副学長 附属病院長 吉川 公彦

この度、古家先生の後任として奈良県立医科大学附属病院病院長を拝命致しました。

私は奈良県で生まれ、奈良県で育ち、昭和55年に奈良県立医科大学卒業後も、海外留学を除いては殆ど奈良県下でIVR（画像下治療）を専門とする放射線科医として勤務をしており、奈良県と母校奈良県立医科大学を愛する気持ちは誰にも負けないと自負しております。

本学附属病院は地域の医療機関と連携しながら地域医療を支える一方で、奈良県の基幹病院として、また特定機能病院として、高度で先進的な医療を提供する「存在感のある病院」として発展存続する事が求められており、院長に課せられた重責に身の引き締まる思いです。

特に新型コロナウイルス感染症対策は緊急課題であり、法人の対策本部の下に設置された病院部会長として、12個の新しいワーキンググループを立ち上げました。各ワーキンググループでの議論で出た意見や課題を対策本部会議で整理し、方針を迅速に決定することで、刻一刻と変化するこの最大の危機を乗り越えていきたいと思っております。

また、臨床研究中核病院を目指した体制作りを進めるとともに、働き方改革、24時間365日ER体制整備に向けて、現場の皆様の意見を集約しつつ、大学と密に連携して病院運営にあたる所存です。

教職員の皆様ならびに同窓の方々におかれましては、より一層のご支援・ご指導を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。



広報・渉外担当理事 中川 裕介

この度、4月1日付で、広報・渉外担当理事を拝命しました。

ご縁があって、奈良医大で3年ぶりに仕事をさせていただくことになりました。

その間、外部からですが、「奈良医大」のご発展、教職員の皆様のご活躍を見聞きするたびに、嬉しく思っていたところです。

細井理事長・学長は、将来想定される大学統廃合時代に奈良医大が、「主たる大学」として存続するためには、全国的に存在感の大きい大学となることが不可欠と考えられ、積極的な大学運営、改革に取り組んでおられます。

私も、微力ながら全力を尽くす所存です。どうか、従前と同様にご指導とご支援をいただければ、幸いです。よろしくお願いいたします。



研究部長 医学研究科長 吉栖 正典

この度、4月1日付で研究部長、医学研究科長を拝命いたしました。本学は現在、キャンパス移転を控え、長期的展望に立って研究体制を構築していく段階になっています。この目的のため、本年2月に研究戦略推進本部により「研究力向上を目指した行動計画」が策定されました。この中で、1) 研究支援体制の強化、2) 共同研究の奨励、3) 人材の獲得と育成、4) 成果の共有と発信が強調されています。本学の研究力が向上し、大きな成果が得られることに貢献するため全力で取り組む所存です。すべての教職員の皆様方のご指導とご支援をよろしくお願いいたします。



看護学科長 看護学研究科長 石澤 美保子

この度、看護学科長、看護学研究科長を拝命いたしました。飯田前学科長・研究科長から引き継いだ過去2年間は手探りの状態でした。昨年度は無事に大学院看護学研究科にがん看護学（通称 CNS コース）が立ち上がりました。この2年間、ご協力いただいた看護学科教員および教育支援課の皆様をはじめ全ての方々に感謝申し上げます。これからの看護学科の2年間は、看護学教育分野別評価の受審と博士課程（看護学）開設のためのより具体的な準備期間となります。このような重要な時期に再任されたことに責任の重さを感じております。引き続きご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。



教養教育部長 酒井 宏水

平成27年度に医学科・看護学科の一般教育組織を統合し、教養教育部門が新設されました。以来、教育改革2015に基づき様々な構想が具体化されてきました。本部門は多様な分野の教員によって構成され、学問の垣根を越えるとなかなか理解が及ばないことがあります。定例の協議会等で議論を尽くし、少しでも良い方向に解決されるようにしたいと思います。変化の速い時期に教養教育部門長に再任され、責任の重さを感じています。引き続きご支援とご協力を頂きたく、宜しくお願い致します。



基礎教育部長 堀江 恭二

この度、基礎教育部長を拝命いたしました。基礎医学の学習期間は、医学を主体的に学ぶ姿勢を形成するための大切な時期と考えています。先生方のご協力のおかげで、リサーチクラークシップをはじめとした、研究マインド醸成プログラムも定着してきましたが、多様な学生気質に対応するには、教育システムの更なる改善が必要とも感じています。多方面の教職員の皆様との連携のもとに、基礎医学教育の充実に努めたく考えております。何卒、ご支援いただけますよう、よろしくお願い致します。



臨床教育部長 長谷川 正俊

4月1日付けで臨床教育部長（再任）を拝命いたしました。この2年間、医学教育のあり方を真剣に検討して、良き医療人の育成に向けた改革に尽力して参りましたが、臨床教育におけるモデル・コア・カリキュラムの再確認、卒業時まで身に付けておくべき能力を確実に修得可能とするための教育改善等、解決すべき重要な課題がまだ山積しており、さらに新型コロナウイルスの影響も危惧されています。臨床教育と基礎教育、教養教育との連携は言うまでもなく、臨床教育協議会と医学部長、教育開発センター、教育支援課、他との緊密な連携も非常に重要ですので、引き続き、教職員の皆様のご支援、ご協力を賜りますよう何卒よろしくお願い申し上げます。



看護教育部長 川上 あずさ

この度、4月1日付けで看護教育部長に再任されました。平成30年には、看護学科全教員の協力をいただき看護学教育モデル・コア・カリキュラムを見直し、本学のカリキュラムが、ほぼ内容を満たしていることを確認しました。今年度は、指定規則の改正が公表される予定です。本学の強みを活かし、社会の変化に対応しながら、求められる看護学教育を実践していかなければならないと責任の重大さを実感しています。学生が、看護師として社会人として成長発達していけるよう支援していきたいと考えています。引き続きご指導とご協力をいただきますよう、よろしくお願い致します。

2019年度 海外リサーチ・クラークシップ報告

2020年1月～3月、医学科2年生（新3年生）10名が海外の研究室に研究留学しました。日本とは全く違う環境に身を置き、海外の研究者の姿を間近に見ながら研究に没頭する毎日は、多くの学びをもたらしてくれました。また、海外の指導教員、スタッフ、学生との交流を通して、身をもって国際交流を体験しました。今後は、自身の留学体験を他の学生と共有し、本学の発展に貢献して参ります。

海外の研究室をご紹介頂き、事前トレーニングのご指導を賜り、学内、学外の多くの皆様のご協力を得て、2019年度海外リサーチ・クラークシップを無事に終えることができました。学生に貴重な留学の機会を与えて頂き、心より御礼申し上げます。

*リサーチ・クラークシップとは、医学科2年生を対象としたプログラムで、早期に国内外の研究施設に参加することにより、研究マインドを育てることを目的としています。



12月20日開催の壮行会にて

所属研究室・海外留学先紹介

医学科3年 時永 志帆

Singapore

海外留学先：National University of Singapore

私は上記の研究室で、心臓で特異的に働いて2種類の遺伝子 Arrb2 と Grk2 をノックダウンさせる shRNA を作成し、その効能を評価するという研究を行いました。

研究室の方々は不慣れな私に対し本当に親切で優しく、ラボの一員であるかのように温かく接してくださいました。

今回の実習で、実験の原理や手技の方法など、今後の研究で活用できることを学び得たのはもちろんですが、それ以外に、休日にも様々な国籍の人々と出会い、文化や風習の違いを実感するなど、非常に貴重な経験をしました。

私を支えてくださったたくさんの方々、本当にありがとうございました。



研究室の方々との最後のお別れ会

MESSAGE

医学部長
嶋 緑倫



本学では早期から専門領域の研究を体験することによって研究マインドを育成する目的で、医学科2年生の3学期に10週間のリサーチ・クラークシップを実施しています。国内のみならず、2016年から海外の著名な大学の研究施設でのクラークシップも始まりました。これまで、延べ53名の学生が32研究室に参加しました。参加するためには英語の試験や英語の追加選択科目や医学研究入門の習得などのハードルがありますが、医学研究の体験のみならず国際的なコミュニケーション力がつき、大きく飛躍できることが実感できると思います。是非挑戦してください。

基礎教育部長
堀江 恭二
(第二生理学教授)



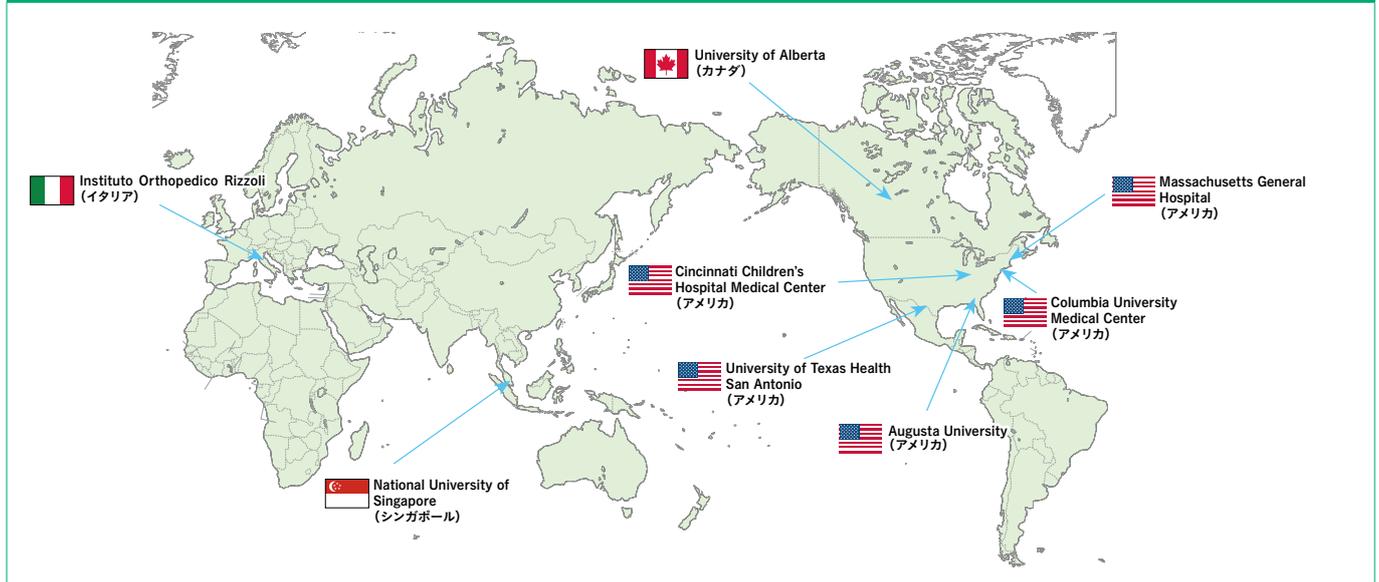
リサーチ・クラークシップは、2年生の最後の3ヶ月に行われます。多くの学生は、それまでの1年近い専門課程で、基礎医学の膨大な知識の吸収に終始してきたことと思います。リサーチ・クラークシップでは、それとは逆に、自らが知識を創出する側に回ります。海外・学外での研修は、自分を客観視する場にもなるでしょう。この機会に医学の奥深さを体感し、それを契機に、その後の学生生活において、医学に積極的に関わっていただくかと思っております。

海外リサーチ・クラークシップ
担当教員
森 英一朗
(未来基礎医学准教授)



本学での海外リサーチ・クラークシップ4年目となる昨年度は、10名を海外の研究室に派遣しました。多くの学内の先生方からの紹介で、過去4年間で合計32研究室に53名を派遣してきました。帰国後も研究室に所属して研究活動を継続する学生が徐々に増えてきており、研究マインドを持った学生が着実に育ってきている実感があります。さらに卒後のキャリアパスへと継続性を持たせることが出来るような体制を整えて参ります。

2019年度海外リサーチ・クラークシップ留学先 (8施設)



所属研究室・海外留学先紹介

医学科3年 洪 永鎮

Italy

海外留学先：Istituto Ortopedico Rizzoli

ポローニャのRizzoli Centro Ricercaで約2か月間勉強させていただいた。まず最初に、この留学を支えてくださった分子病理学教室の先生方、および大学の事務の方々や森先生・塚本先生をはじめとする大学の先生方、資金提供者の方々に深く感謝申し上げます。私一人では到底海外に留学するなどということは叶わなかったでしょうし、この留学をより実りあるものとしたのは皆様のおかげであることを帰国してから身にしみて感じています。留学先では、物質科学系の研究を見させていただくことができました。普段目にするようなものとは異なる方向の研究ではあったこともあり、新たな視点獲得につながったのではないかと思います。海外で生活するにあたり、必ずしもコミュニケーション面などで順風満帆にはどうしても行かないこともありましたが、そうして苦勞し、もがいたことも長期的には私の財産になってくれたことと思います。最後にもう一度、私を支えてくださった皆様に謝意を申し上げます。この挨拶の結びとさせていただきますしたいと思います。



ラボのみんなとの最後の記念撮影

医学科3年 喜多 真由

Canada

海外留学先：University of Alberta

はじめまして。今回、館野ラボにて研修させて頂きました医学科三年の喜多真由です。

館野ラボは下垂体腫瘍のバイオマーカー探索やホルモン調節・内分泌についての研究を行っている世界でも数少ないラボであり、私もそのプロジェクトの一環に参加させて頂きました。およそ三か月という短い時間の中で自分がプロジェクトに対してできることはやはり多くなく、その後のプロジェクトに参加できないもどかしさはありませんが、それでもこの期間で学べたものはすごく私にとって大きく、これからの私の人生においての糧となると感じており、唯一無二の経験となりました。



館野ラボにて実験を行っている所

医学科3年 山田 愛

Canada

海外留学先：University of Alberta

私はリサーチクラークシップにおきましてカナダのエドモントンにあるClinical Islet Laboratoryで10週間実習を行わせていただきました。Clinical Islet Laboratoryは世界有数の膵島単離・移植数を誇り、実習中も多くの症例を見学させていただきました。その他にも世界各地に存在する他の膵島研究施設に送る膵島の準備を手伝っていただいたり、十二指腸の解剖を行わせていただいたり、膵臓の発生・解剖について学ばせていただいたり大変充実した実習でした。このプログラムに携わってくださった全ての方に心から感謝申し上げます。



Clinical Islet Laboratoryにて

医学科3年 若山 勝紀

USA

海外留学先：Augusta University

はじめに、今回の留学の機会を与えてくださった関係者の皆様に感謝申し上げます。留学先の研究室では、心臓血管に関する研究を行いました。短い期間のなかで、集中して研究に取り組むことが出来る環境に身を置くことはとても新鮮でした。プロジェクトの一端に関わり、小さいながらも結果を出すことが出来ました。さらに今回の研究留学を通して、研究への興味が増しました。また、研究室以外でも様々な人と関わることで英語が上達するだけでなく、異なる文化に対する理解を深めることが出来ました。今回の留学の体験を活かして、今後も研究を続けていこうと思います。



研究施設の前にて

医学科3年 二川 真由

USA

海外留学先：University of Texas Health San Antonio

私はSandeep Burma教授の研究室で脳腫瘍に関する研究をさせていただきました。ラボの皆様はとても親切にしてくださり、実験手技のみならず研究の組み立て方から丁寧に教えていただきました。帰国後の研究活動に生かすことのできる経験ができました。またアメリカでの生活は何もかも新鮮で、現地の学生との交流により視野が広がりました。今後の医学の勉強の励みになり、将来の働き方を考える機会にもなりました。

今回の留学では事前トレーニング、ビザ取得等の準備段階からたくさんの方々にお世話になり、非常に多くのことを学びました。このような貴重な機会を与えていただきありがとうございました。



ラボの先生方と研究棟前にて

医学科3年 原田 安美

USA

海外留学先：University of Texas Health San Antonio

アメリカ、テキサス州、UT Health San Antonioにある藤川先生の研究室で研修しました。原田安美です。このラボでは、改良したトランスフェクション法、AAV精製法を用いて、異なるセロタイプ毎のAAVの遺伝子導入率を比較しました。このプロジェクトを通して、トラブルシューティングや自分の研究内容を説明する大切さを学びました。

ラボのメンバーと、時にプライベートを共にした経験は宝物です。今回お世話になった、UT Health San Antonioの皆様、奈良県立医科大学の皆様、未来飛躍基金の皆様全員に感謝の気持ちを忘れず、今後も研究活動に励むことで、還元できればと思います。



研究室のメンバーと共に

医学科3年 山田 航大

USA

海外留学先：Cincinnati Children's Hospital Medical Center

この10週間の実習を通して、本当に多くのことを学ばせていただきました。その中でも特に、今までのように与えられた問題をただ単に解決する能力だけでなく、自分で問題を見つけ、それを自分の力で解決する能力が大切であることを痛感しました。また、Supervisorである坂部先生には僕に欠けている部分を多く指摘していただき、今までの自分を振り返る機会となりました。坂部先生をはじめとして、この実習に関わってくださった全ての方に感謝したいと思います。Cincinnatiでの経験を活かし、立派な医師になれるよう今後も励みたいと思います。ありがとうございました。



食事スペースでsupervisorと

医学科3年 竹下 沙希

USA

海外留学先：Columbia University Medical Center

私はColumbia University Medical CenterでDr. Matthias Quickの下、トランスポーターについての研究をさせていただきました。現在進行中のプロジェクトに参加しながら研究の一連の流れを学ぶことができ、とても有意義な時間を過ごすことができました。

New Yorkでの生活は新鮮な体験に溢れており、毎日が刺激的でした。研究室ではラボメンバーの方々と交流し、研究やNew Yorkでの生活などについて様々なことを教えていただきました。

10週間の貴重な経験を糧に、これからも様々な活動や学習に励みます。



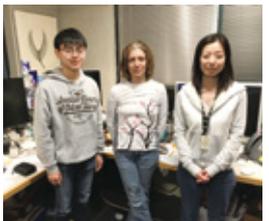
トランスポーター精製の機械を操作している様子

医学科3年 森 祐貴

USA

海外留学先：Massachusetts General Hospital

アメリカ有数の学術都市であるボストンに10週間留学しました。奈良とはまた違った、世界の最先端のラボの雰囲気を感じられました。研究者交流会にも何回か参加し、医学のみならず様々な分野の研究を知ることができました。また、ハーバード大学の学生の知り合いもでき、授業を受ける日もありました。休日は、アメリカで最も古い歴史をもつ街で建国の歴史を辿ったり、美術館で芸術作品を鑑賞するなど非常に文化的な生活をおくることができました。この貴重な経験を今後の人生の糧とすべく、これからも研究に邁進してまいります。



実習最終日の夜、お世話になったProf. Georgopoulos, Dr.Kashiwagiと共に

2019年度海外リサーチ・クラークシップ留学先 (8施設 10名)

- Augusta University (USA)
- University of Texas Health San Antonio (USA)
- Columbia University Medical Center (USA)
- Massachusetts General Hospital (USA)

- 若山 勝紀
- 原田 安美
- 二川 真由
- 竹下 沙希
- 森 祐貴

- Cincinnati Children's Hospital Medical Center (USA)
- University of Alberta (Canada)
- Istituto Ortopedico Rizzoli (Italy)
- National University of Singapore (Singapore)

- 山田 航大
- 山田 愛
- 喜多 真由
- 洪 永鎮
- 時 永志帆

令和2年度 公立大学法人奈良県立医科大学予算

令和2年度は、第3期中期計画の2年目であり、様々な取り組みを軌道に乗せることに配慮することが必要になってきます。そのため、目標の達成及び計画の遂行、また新キャンパス整備に必要な予算について、県等からの支援を活用し、必要な予算を確保するとともに、法人の安定した運営のための収入の確保、支出の削減に努めた予算編成を行いました。

予算規模については、人件費や診療経費等の増加が見込まれ、平成31年度の550.0億円と比較して8.2億円増の558.2億円となりました。

令和2年度の主な取組として、A棟改修工事や建物の耐震対策といった施設整備に加え、第3期中期計画にある「良き医療人の育成」や「県内基幹病院として地域医療の充実への貢献」など、法人の将来を見据えた取り組みを引き続き行います。

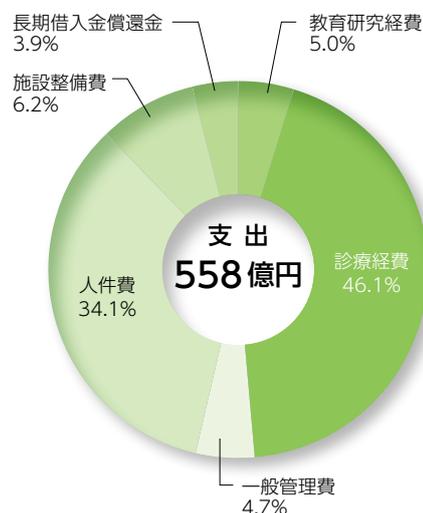
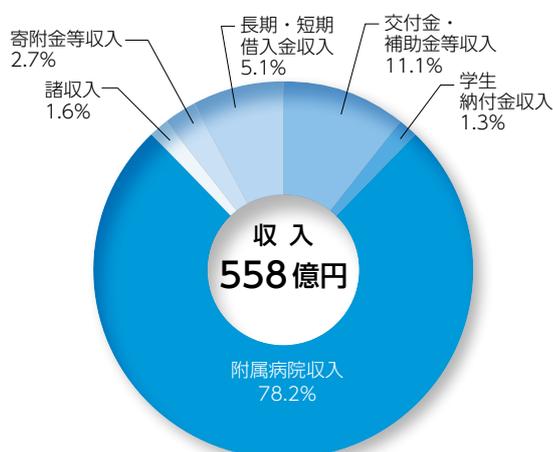
また、埋蔵文化財発掘調査、建物基本設計や造成詳細設計など、新キャンパス移転に向けた取り組みも引き続き行います。

法人の更なる発展のため、中期計画の円滑な遂行、効率的な法人経営の推進について、教職員の皆様には、それぞれの分野でのご協力を引き続きよろしくお願いいたします。

令和2年度予算の内容

収入	項目	予算額	構成比
収入	法人が自ら得た収入 (自己収入)	453.0億円	81.1%
	附属病院の診療報酬等 (附属病院収入)	436.5億円	78.2%
	学生が納付した収入 (授業料・入学金・入学検定料)	7.3億円	1.3%
	その他の収入 (諸収入)	9.2億円	1.6%
	他機関等からの支援 (交付金・補助金)	61.9億円	11.1%
	県からの支援 (運営費交付金等)	50.8億円	9.1%
	国等からの支援 (補助金収入)	11.1億円	2.0%
	職員が集めた収入 (受託研究・寄附金等収入)	14.7億円	2.7%
	借入金 (長期借入金等収入)	28.6億円	5.1%
	収入計	558.2億円	100.0%

支出	項目	予算額	構成比
支出	義務的に支払う必要のある経費 (人件費、償還金)	211.8億円	38.0%
	職員への給与の支払い (職員給与)	184.7億円	33.1%
	退職手当の支払い (退職手当)	5.4億円	1.0%
	借金の返済 (長期借入金償還金)	21.7億円	3.9%
	業務の運営に必要な経費 (業務費等)	311.9億円	55.8%
	大学での教育研究に 必要な経費(教育研究経費)	28.6億円	5.0%
	附属病院での診療に 必要な経費(診療経費)	257.2億円	46.1%
	法人の運営全般に 必要な経費(一般管理費)	26.1億円	4.7%
	施設整備や医療機器購入経費 (施設整備費)	34.5億円	6.2%
	支出計	558.2億円	100.0%



令和2年度予算の主要事業・新規事業

地域貢献

適切な医師派遣システムの確立、学生の県内就職率の向上

- 県立医大医師派遣センターの運営
● 県費奨学生配置センターの運営
23,600千円 (H31 23,600千円)
医師配置の一元的な運営体制のさらなる整備、県費奨学生の地域配置などの支援
- 県民健康増進支援センター運営
18,300千円 (H31 18,300千円)
市町村や県の健康増進事業に協力するとともに、予防医学や健康づくりの適切な情報や研究成果を提供
- ドクターヘリ運航推進事業 253,400千円 (H31 252,300千円)
ドクターヘリ運航にかかる委託経費等
- ERの運営 79,000千円 (H31 139,200千円)
県からの交付金を受け、安定的にERを運営して救急医療体制の強化・向上を図る

教育・研究部門

学生生活支援体制の充実、将来を担う優秀な学生の確保、研究成果の地域への還元、研究支援体制・研究環境の充実

- 良き医療人育成推進事業 44,700千円 (H31 47,200千円)
豊かな人間性に基づく高い倫理観と旺盛な科学的探求心を開き、最善の医療提供を行う強い意志を持った医療人の育成
- 医師・患者関係学講座事業 33,000千円 (H31 33,000千円)
医師としての人間性を育むための支援を行う講座の設置・運営にかかる経費
- 看護学研究科生研究環境整備事業 5,000千円
看護学研究科生の研究環境を整備するための研究室改修に要する経費
- 重点研究推進事業 23,200千円 (H31 37,400千円)
血栓止血の制御に関する研究および画像下での低侵襲医療(IVR)に関する研究
- 若手・女性研究者等への支援事業 45,400千円 (H31 45,000千円)
若手研究者や女性研究者の研究活動に対して助成等を行い、更なる研究の発展を図る

診療部門

法人の将来を見据えた大規模な投資、患者サービスの向上、病院機能の充実

- A棟改修事業 1,315,500千円 (H31 1,056,300千円)
臨床医学研究棟の仮移転先としてA棟改修を実施
- 特別室等緊急改修事業 20,000千円
老朽化したB棟特別室等の改修に要する経費
- 病院機能評価受審事業 17,200千円
病院機能評価の受審に要する経費
- 臨床研究センターの機能充実 338,900千円 (H31 233,100千円)
臨床研究中核病院の認定取得のため、臨床研究センターの機能を充実

まちづくり

医科大学を中心としたまちづくりの推進

- 医大周辺まちづくりプロジェクト事業 668,600千円 (H31 238,200千円)
新キャンパス建物基本設計や臨床医学研究棟設備改修工事等にかかる経費

管理部門

法人組織の円滑な運営・福利厚生への充実、事務の合理化の推進

- なかよし保育園の運営 155,000千円 (H31 157,300千円)
職員の保育ニーズに対応するため、運営委託等を実施
- 働き方改革推進事業 8,600千円 (H31 24,500千円)
働きやすい魅力ある職場環境づくりに向け、職員の意識調査や出退勤管理システムの改修等を実施
- 耐震対策事業 248,800千円
耐震性能が低い施設の応急対策を行うための経費
- 防災・BCP関連経費 32,100千円
大規模地震等の自然災害に備えた体制作りや備品の購入、施設の改修を行うために必要な経費

未来への飛躍基金だより

平素より「未来への飛躍」基金に対しご理解とご協力を賜り、心よりお礼申し上げます。

今号は、寄附申込状況及び使途について3点ご報告させていただきます。

1つ目は、2019年度の寄附申込状況についてです。2019年度は合計**489件、230,142,638円**（2020年3月31日現在）の寄附申込をいただきました。ふるさと寄附については2020年度に奈良県により最終集計が行われ、2021年度に、寄附金相当額が奈良県大へ交付されます。2019年度は、2018年度に引き続き寄附申込をくださった方が8割程度となり、事務局では、未来への飛躍基金の知名度の向上と、毎年寄附をくださっている皆様によって、未来への飛躍基金が支えられている、ということにより一層強く感じております。今後も、寄附をしていただく方々の期待に沿えるよう基金を活用してまいります。

2つ目は、前号に引き続きクラブ活動への助成についてです。基金では、クラブ活動支援の一環としてクラブ棟の老朽化対策や、環境整備に力を入れております。8月にはクラブ棟のコンセント増設、2月にはバッティングゲージを購入しました。また、運動部だけでなく文化部へも積極的に助成をしていけるよう学生の意見を反映させながら進めてまいります。

3つ目は、ワーキンググループ（WG）についてです。基金を柔軟にかつ効果的に活用していけるよう、WGを設置致しました。様々な視点から基金をよりよくするための話し合いが行われます。例えば、寄附の申込み手続きの簡素化や基金の活用について、検討していきます。今までは、新規事業を行う

にあたり速効性をもって十分に対応できなかったこともございましたが、今後皆様からのご要望をより基金事業に反映させ、学生や教職員への支援や、地域貢献に関して、一層の充実につなげていきたいと考えております。

これからも引き続き、教育・研究・診療活動へ支援していくとともに臨床研究中核病院承認取得への取組、更に今後、キャンパス移転に伴う施設整備にも基金を拠出する予定です。昨今、大学の統合が進められている中、本学が全国的に存在感のある大学として、存続していくためには皆様からの継続的なご協力・ご支援が不可欠です。今後も引き続きご協力を賜りますようよろしくお願いいたします。



購入したバッティングゲージ

お知らせ

●基金事務局が引っ越しました。

4月1日より、基金事務局は大学本部棟2階総務課内へ引っ越しました。寄附の申込に来られる際にはお気を付けください。なお、電話番号やメールアドレス等の変更はありません。

●寄附者銘板を更新しました。

附属病院D棟1階北側に設置しております寄附者銘板を、更に見やすく更新いたしました。



奈良県立医科大学総務課基金推進係 TEL：0744-23-9973（直通） E-mail：hiyakukikin@narmed-u.ac.jp

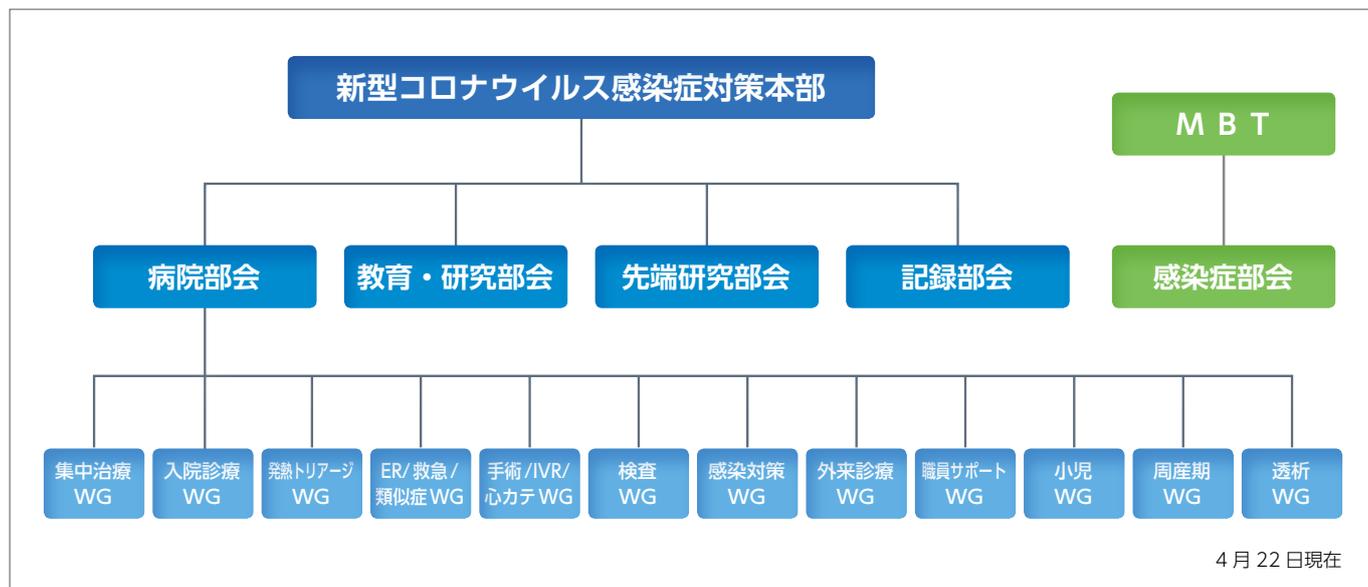
本学の新型コロナウイルス感染症対策について

新型コロナウイルス感染症が猛威をふるっています。奈良県でも3月5日までは累計1人だった感染者数が、4月22日時点で75名まで急速に増加しています。今後、この感染者数はさらに増加し、このまま何も対策を行わなければ7月中旬頃までに奈良県だけで約22万人が感染するというシミュレーションもあります。こんな中、当院では新型コロナウイルス感染症患者用に、最大150床の病床を確保するように奈良県から指示されています。一つの疾患のために、当院の5～6床に1床が使用されるなんていうことは、今まで経験のない未曾有の事態です。このような事態に病院一丸となって対応する

ために、細井理事長・学長を本部長とする新型コロナウイルス感染症対策本部が立ち上がり、その下に病院部会や教育・研究部会、先端研究部会、記録部会などが作られ、さらにその下に様々なワーキンググループが立ち上がりました(図)。

ウイルスは待ってくれません。この学報は5月中旬に発行予定とのことですが、今は目先のゴールデンウィークをどう乗り切るか、それが最大の焦点になっています。本学全体を挙げた取り組みにご協力をよろしくお願いいたします。

感染症センター長 笠原 敬



図

A病棟改修工事が一部完成しました

老朽化した臨床医学研究棟の機能移転及びA病棟内の病棟・医局・事務室の改修を行う「A病棟改修工事」について、5階部分が令和元年12月に、4階部分が令和2年1月に竣工し、供用を開始いたしました。

【4階】 A棟7階北にあった眼科・皮膚科・形成外科・総合診療科の病棟を移転。新たに救急科の病床も設置。

- ・病床数【施設基準届出病床】47床→56床
眼科18床 皮膚科・形成外科13床 総合診療科16床 救急科6床 共用病床3床
- ・6人部屋を廃止して、4人部屋とし、患者環境を改善。

【5階南】 臨床医学研究棟に所在する講座のうち4講座(消化器・総合外科学、皮膚科学、麻酔科学、放射線腫瘍医学)の機能を移転。

【5階北】 A棟6階南(一部A棟6階北)にあった機能を移転。放射線腫瘍医学講座、糖尿病・内分泌内科学講座、医師・患者関係学講座、感染症センター、先天性心疾患センター、総合画像診断センター、感染管理室、医療安全推進室、会議室など



看護部の紹介

A棟4階病棟の紹介

当病棟は令和2年1月11日A棟7階北からA棟4階に移転となり、従来からの診療科である眼科、皮膚科・形成外科、総合診療科に加え、救急科6床を含めた合計56床として運用を開始しました。

A棟の構造も変わり、南北に詰所が配置され病棟が広くなり、看護師の導線も長くなりました。個室は14床に増え、大部屋も6人部屋から4人部屋となり入院環境も改善しました。

各診療科の特性として、眼科は年間1500件の手術があるため、同日での入退院が多くあります。皮膚科・形成外科は難治性の疾患も多く、掻痒感や苦痛を伴うため精神的援助も必要とされます。総合診療科は自己免疫疾患や確定診断のための各種検査、内科ERの受け入れを行っています。救急科は急性期を脱したHCUからの転棟患者を受け入れる病棟として機能しています。

混合病棟の強みとして、外科・内科に関わらず多種多様な疾患が、経験できる機会があります。そのためスタッフは、各診療科の枠を超えて応援機能を発揮し、医師をはじめとした多職種と連携をしながら日々看護業務に頑張っています。



眼科処置室

認定看護師の紹介

認定看護管理者 看護副部長
福山 麻里

超高齢社会を迎え、医療体制は病院完結型から地域完結型へ変化しつつあります。多様なヘルスケアニーズを持つ個人家族及び地域住民に対して、質の高い組織的看護サービスを提供することを目指し、保健医療福祉に貢献することを目的に、日本看護協会は認定看護管理者制度を策定しています。この度2019年に認定看護管理者の認定を受けました。「奈良県民を守る最終ディフェンスライン」の使命の元、看護管理者として役割を遂行できるよう、そして地域医療に貢献するために努力して参ります。



D棟2階 認知症看護認定看護師
松田 恵美

認知症看護認定看護師の資格を取得しました。高齢者の4人に1人が認知症といわれる現状で、急性期病院においても認知症やMCI（軽度認知障害）の方は珍しくありません。身体疾患を治療する中で、1人1人と向き合い丁寧にアセスメントし、いかに認知機能を低下させずに地域へ戻せるかが課題であると考えています。地域と連携し認知症の啓蒙活動を続け、院内の部門や職種を超えて専門的な視点で支援できるように研鑽を積む所存です。



B棟5階
脳卒中リハビリテーション看護認定看護師
弓場 由美子

脳卒中リハビリテーション看護認定看護師の資格を取得しました。

脳卒中は生活習慣病との関連が強く、10人中3.5人が再発している現状があります。脳卒中の再発予防に力を入れ、多職種と協働して高次脳機能障害や身体障害を有しても社会復帰ができるように意図的に関わり、画像や病態から生じ得る症状を予測した看護を提供しています。また、所属を越えて脳卒中に関する相談にお応えできるよう努めていきたいと考えています。



奈良県看護協会災害支援ナースに登録しました

看護部中央内視鏡部 看護師長 森川 知子
看護主査 竹村 佑子
看護部腫瘍センター 看護主査 前川 容子

今年度私たちは奈良県看護協会災害支援ナースに登録しました。災害支援ナースは看護職能団体の一員として、被災した看護職の心身の負担を軽減し支えるように努め、被災者が健康レベルを維持でき、適切な医療・看護を提供する役割を担っています。災害時の看護支援活動は「自己完結型」を基本とされ、平時から準備と備えを心がけておきたいです。奈良県看護協会は災害支援ナースを募集しています。みなさん災害支援ナースに登録しませんか。



JTAS日本救急学会トリアージコース研修に参加して

高度救命救急センター HCU
岡本 施津子

JTASは救急外来などでのトリアージで緊急度の判定に用いられるツールです。多数の傷病者を同時に対応する救急外来では、トリアージによる緊急度（対応する患者の優先順位）の迅速・正確な判断が求められます。患者の訴え、兆候は何を意味するのか、緊急性は高いのか、様子を見ていいのか、医師に報告すべきなのか等、事例検討、シュミレーションを重ねる事で、状況判断力やアセスメント力を向上させる事ができると思います。救急外来だけでなく、一般病棟でも必要とされる能力であり、現場に即した知識やスキルを学ぶ事ができたと思います。



がんゲノム医療コーディネーター研修会を受講して

看護部 看護主任 竹本 恵
乳がん看護認定看護師 宮城 恵
がん看護専門看護師 梅岡 京子

2019年6月保険収載された「がん遺伝子パネル検査」が当院でも開始されます。私たちは、がんゲノム医療・がん遺伝子パネル検査における患者・家族への看護に活かすため「がんゲノム医療コーディネーター研修会」に参加しました。

がん遺伝子パネル検査は、標準治療が終了した（終了が見込まれる）患者に新たな治療の可能性をもたらします。しかし、この検査によって薬剤治療に結び付くのは1割程度と言われており、多くの患者が「これ以上積極的治療の選択肢がない」

2019年度看護研究発表会を開催しました

3月7日、大講堂で「2019年度看護研究発表会」を開催しました。20部署より22演題の発表があり、日常の看護実践からの課題をテーマに研究的視点で取り組んだ成果が発表されました。計150名の参加があり会場から活発な意見交換が行われ、看護の質向上を目指した新たな知の創造につながる場となりました。昨年に引き続き表彰制度を行い、看護部長賞には、C病棟8階の坂元恵さん「間質性肺炎患者のアドバンス・ケア・プランニングに関する医師・看護師の認識」が受賞されました。その他、臨床研究委員会賞、ナイス発表賞など計3演題が選出されました。今年度からは新しい取り組みとしてWEB抄録やWEBアンケートを取り入れました。



看護師救急医療業務実地修練を修了しました

A棟4階 副師長 高野 勝彦

トリアージナースの役割は、救急対応が必要な場面において医学的な根拠に基づいた緊急度判定を行い、迅速な対応が必要な患者に対し、治療や検査の準備など重症度や緊急度に応じた診療の場の調整である。また、医療チームとの効率的な連携の調整を行うことや患者・家族への説明と倫理的な配慮を行うことが求められます。災害現場だけでなく、病院施設内においても研修で学んだことをもとに看護業務に活かしていきたいと考えています。



機関リポジトリGINMU (ジンム) のご紹介

皆様は「機関リポジトリ」というものをご存じでしょうか？

機関リポジトリとは「機関」に所属する研究者の文献を収集し、無料で公表するデータベースのことを言います。

過去の学報にも 18、34、35 号に機関リポジトリについての記事がございますので、ぜひご覧ください。

当学でも 2008 年に「GINMU」という名称で開設し、2019 年からは文献の収集対象を奈良県内の医療機関、学会に広げ、運用しております（学報の過去分も掲載しております）。

※奈良医大機関リポジトリ GINMU : <http://ginmu.naramed-u.ac.jp/>

※学報ページ : <http://hdl.handle.net/10564/2799>



■ 2019 年ダウンロードランキング

開設してちょうど 10 年という区切りではありませんが、10 年以上の運用を経たということから今回はこの機関リポジトリ GINMU に収録された文献のダウンロード件数のトップ 10 ランキング (2019 年) を発表したいと思います。

※ダウンロード件数下の URL にアクセスしていただくと文献ページをご覧いただけます。

2019 年文献ダウンロードランキング

第 1 位	患者のセルフケア向上につながる効果的な指導を目指して：化学療法を受ける患者にパンフレットを活用した指導を導入した試み/山田利佳ほか著 (葦 第 42 号 p.95-98)	16656 ダウンロード http://hdl.handle.net/10564/3062
第 2 位	透析用留置カテーテルケアの検討：抗凝固剤充填および消毒・固定方法の変更を試みて/白砂祐美子ほか著 (葦 第 36 号 p.111-114)	11710 ダウンロード http://hdl.handle.net/10564/2550
第 3 位	CV 挿入中患者の入浴時の保護における浸水しない 3 条件：カテーテルの長さ、カテーテルの固定法、オプサイトの大きさについての検討/村田恵ほか著 (葦 第 36 号 p.80-82)	11056 ダウンロード http://hdl.handle.net/10564/2542
第 4 位	看護師による退院指導の有効性：婦人科良性疾患による開腹手術を受けた患者のアンケートを通して/阪本侑希ほか著 (葦 第 39 号 p.130-133)	10321 ダウンロード http://hdl.handle.net/10564/2362
第 5 位	病名を告げられた癌患者の受容過程と看護師の関わり/藤田ひとみ ほか著 (葦 第 35 号 p.46-49)	10311 ダウンロード http://hdl.handle.net/10564/2575
第 6 位	術後仰臥位安静における腰痛緩和に対する体位の工夫：バスタオル挿入と下肢屈曲を行って/西川由起 (葦 第 36 号 p.73-76)	7660 ダウンロード http://hdl.handle.net/10564/2541
第 7 位	A 病棟看護師の環境整備の認識調査：インタビューを行って/西村彩夏ほか著 (葦 第 46 号 p.37-40)	7529 ダウンロード http://hdl.handle.net/10564/3401
第 8 位	ハローベスト装着患者の清潔保持の向上を目指して：ハローベスト使用病院への実態調査より/川井由里江ほか著 (葦 第 39 号 p.108-110)	6856 ダウンロード http://hdl.handle.net/10564/2356
第 9 位	呼吸器疾患患者に適した洗髪体位の検討：セミファーラー位と前屈位を比較して/福山景子ほか著 (葦 第 35 号 p.100-103)	6707 ダウンロード http://hdl.handle.net/10564/2585
第 10 位	A・B 病棟における抑制に対する看護師の意識調査/米田愛里沙ほか著 (葦 第 45 号 p.55-58)	6203 ダウンロード http://hdl.handle.net/10564/3244
番外	異型精子細胞における膜構造の電子顕微鏡的研究/手塚治 (奈良医学雑誌 Vol.11 No.5 p.719-735)	5151 ダウンロード http://hdl.handle.net/10564/1075

この様に上位 10 件はすべて当学附属病院看護部紀要「葦」が占めております。

また惜しくもランク外ですが、手塚治虫氏の学位 (博士) 請求論文も多く閲覧されているようです。

機関リポジトリに登録する利点として、メタデータ (文献の二次情報※タイトルや著者名、抄録をテキスト化したもの) の付与が重要となっており、そのメタデータがあることによって検索エンジンなどから検索しやすくなっております。

また国立情報学研究所や国立国会図書館との連携も確立されており、本文データを含む文献情報が定期的に Web 上で自動収集され、CiNii や国立国会図書館デジタルコレクションなどのデータベースなどにも反映されます。

その結果、登録文献はより多くの人目に触れることになり、引用率の向上を期待することができます。

図書館では随時機関リポジトリへの登録を募集しております。この機会にぜひご検討ください。

問い合わせは附属図書館 (2293、2392) までお願いいたします。

MBT研究所だより (第16報)

1. 新型コロナウイルス感染症等に対応する研究スタートします

医療機関では、院内感染を防ぐために、感染が疑われる患者と一般の患者を分けて診療する取り組みが行われていますが、多くの医療機関ではもともとゾーニングを意識した設計が行われていないため、その対応に頭を悩ませているのが現状です。

奈良医大では11年前の新型インフルエンザが流行したときに、MBTの前身ともいえる寄附講座「住居医学講座」で、ダイワハウス工業(株)、ダイワリース(株)との三者共同で、全国に先駆けてゾーニングや効果的な換気を可能にしたプレハブ型の「発熱外来」を開発し、奈良県と連携して県内の医療施設で運用した貴重な経験を有しております。新型コロナウイルス感染症が全世界で猛威を奮っていることを受け、この成果に注目が集まりそうです。

2. 大阪西梅田のブリーゼタワーに「MBT LINK Lab.umedasatellite」を開設

大阪・西梅田のブリーゼタワー3階の一角に、奈良医大発ベンチャー企業MBTリンク(株) (代表取締役社長:梅田智広研究教授) が昨秋から「MBT LINK Lab.umedasatellite」を開設しています。そこではMBT LINK personal 商品が無料で使える状態にあり、MBT Smart Watchで自身のバイタル計測や環境計測データをもとに、健康やストレス緩和に関わるアドバイスを端末装置から受けられるサービスが行われています。また、北原教授、梅田研究教授も関わった奈良医大の研究成果である昭和西川(株)の「睡眠頭位調節マットレス」も展示されており、めまいで悩む方へのめまい予防情報を提供しています。さらには、有償サービスにはなりますが、MBT会員企業のユニオンツール(株)のホームECGによる心電評価、ヘルスグリッド(株)のボディスコア、メタボスコアの計測・評価、精神/心理評価や毛細血管計測などのヘルスチェックサービスが行われています。



MBT LINK Lab.umedasatellite



睡眠頭位調節マットレスの展示

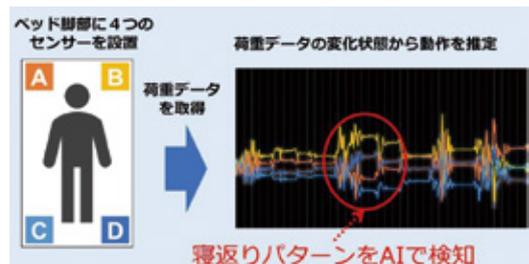
3. 奈良医大と凸版印刷が(国研)情報通信研究機構の委託研究の実証実験を開始

凸版印刷(株)が代表研究者、奈良医大が連携研究者として、(国研)情報通信研究機構の委託研究を、2019年から「LPWAと3次元センシングを活用した病院・介護現場における負担の軽減」と題した研究テーマで実施しております。奈良医大の連携研究者は、杉江和馬教授、形岡博史准教授です。

2019年度は奈良医大の実証実験に向けて、凸版印刷(株)がセンシングや通信機材、センシングデータ処理ソフトの準備を進め、2月21日から奈良医大の病室で実証実験を開始しました。この実証では、①3次元センシングで取得したデータと褥瘡予防の相関関係の検証、②奈良医大がこれまで培ってきた褥瘡予防のノウハウの可視化を行っております。



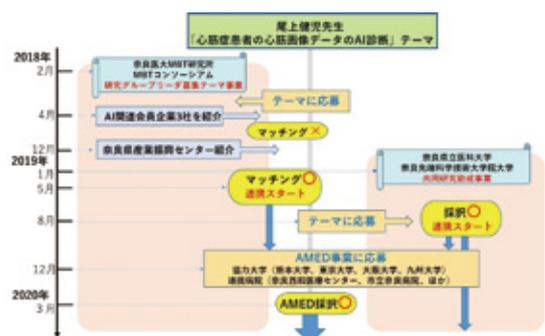
荷重センサーのプロトタイプ



実証実験の概要

4. MBT研究グループリーダ募集で支援のテーマがAMED採択

「2018年度MBT研究グループリーダ募集」で支援をしていた尾上健児先生のテーマ「突発性心筋症の診療に直結するエビデンス創出のためのAIを活用した自動病理診断システムの開発～希少・分類不能心筋症の自動抽出システムの開発～」が(国研)日本医療研究開発機構の「難治性疾患実用化研究事業」に採択されました。心筋病理診断は侵襲的でもあり、また心臓病理を専門とする病理医や循環器内科医は全国的にも少なく、更には正確に診断できる専門家が少ないことから、AI技術を用いた自動診断システム構築を目指しております。



尾上先生の研究進展の流れ

安全保障輸出管理制度がスタートしました

日本では平和国家としての立場から、国際的合意に基づき、大量破壊兵器をはじめとする兵器等に用いられる可能性の高い貨物の輸出や技術提供に関して、外国為替及び外国貿易法（外為法）により厳格な輸出管理が行われています。

本学においても、研究が兵器等に転用されることのないよう、安全保障輸出管理への取り組みを2020年4月1日から本格的に始めました。

安全保障輸出管理とは

安全保障輸出管理とは、日本を含む国際的な平和及び安全の維持を目的として、武器や軍事転用可能な貨物（装置・試料等）及び技術を大量破壊兵器の開発等を行っている国やテロリスト等の手に渡ることを防ぐための管理制度です。日本においては、外国為替及び外国貿易法（外為法）に基づいて規制が行われています。

大学における研究活動も規制の対象

安全保障輸出管理では、「貨物の輸出・技術の提供」が対象となります。大学では関係ない規則と思われがちですが、実際には、以下のようない研究活動において、技術提供や貨物の輸出の機会があり、規制の対象となる可能性があります。

■大学における貨物の輸出处

貨物輸出の機会	送付（輸出）の具体例
海外との共同研究等	<input type="checkbox"/> 実験用機器や部品等 <input type="checkbox"/> 研究試料 <input type="checkbox"/> 研究室で合成（自作）した薬品等
学術研究を目的とした研究試料等の送付・持出し	<input type="checkbox"/> サンプル品の送付・持出し <input type="checkbox"/> 自作の研究機材を携行

■大学における技術の提供例

技術提供の機会	技術提供の具体例
学会等での研究発表	<input type="checkbox"/> 国内外の国際会議・シンポジウムでの研究発表・論文発表
留学生・外国人研究者の受け入れ	<input type="checkbox"/> 実験装置・分析装置・機器の使用 <input type="checkbox"/> 研究指導・技能指導（口頭も含む） <input type="checkbox"/> セミナー・打ち合わせ等での情報提供 <input type="checkbox"/> 電子メールやUSBによる技術情報提供
外国からの施設見学等	<input type="checkbox"/> 研究室の設備（実験装置）の見学 <input type="checkbox"/> 技術資料の提供
外国の企業・大学との共同研究	<input type="checkbox"/> 技術情報を電子メールやUSB等で提供 <input type="checkbox"/> 公知でない技術情報の提供 <input type="checkbox"/> 外国人共同研究者の大学訪問の際に技術資料を提供

規制の内容

外為法に基づく輸出規制は、「リスト規制」と「キャッチオール規制」から構成されており、これらの規制に該当する技術の提供や貨物の輸出は、経済産業大臣の事前許可が必要となります。

■ リスト規制…………… 輸出しようとする貨物が輸出貿易管理令別表第1の1～15項に該当する場合又は提供しようとする技術が外為令別表1～15項に該当する場合には、経済産業大臣の許可が必要となる制度です。国際的な合意に基づき、武器及び大量破壊兵器の開発等に用いられるおそれの高い貨物・技術を規制しています。

■ キャッチオール規制… 輸出しようとする貨物や技術が「リスト規制」に該当しない場合でも、相手先（国）・機関の確認や用途等の確認が必要になる場合があります。

■ リスト規制

何を	
■送付する…貨物	■持ち出す…貨物
■提供する…技術	
貨物…輸出令	技術…外為令

■ キャッチオール規制

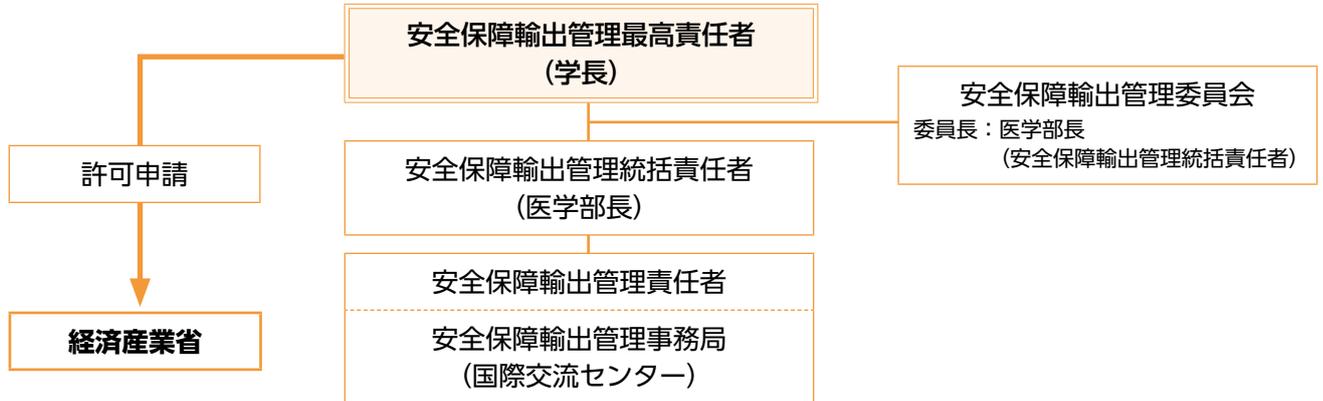
誰に	何のために
■どの国	■目的
■どの機関／組織	■用途
■どんな人	
需要者要件	用途要件

奈良県立医科大学安全保障輸出管理体制

学長を安全保障輸出管理最高責任者とした全学的な安全保障輸出管理体制をとります（下図参照）。

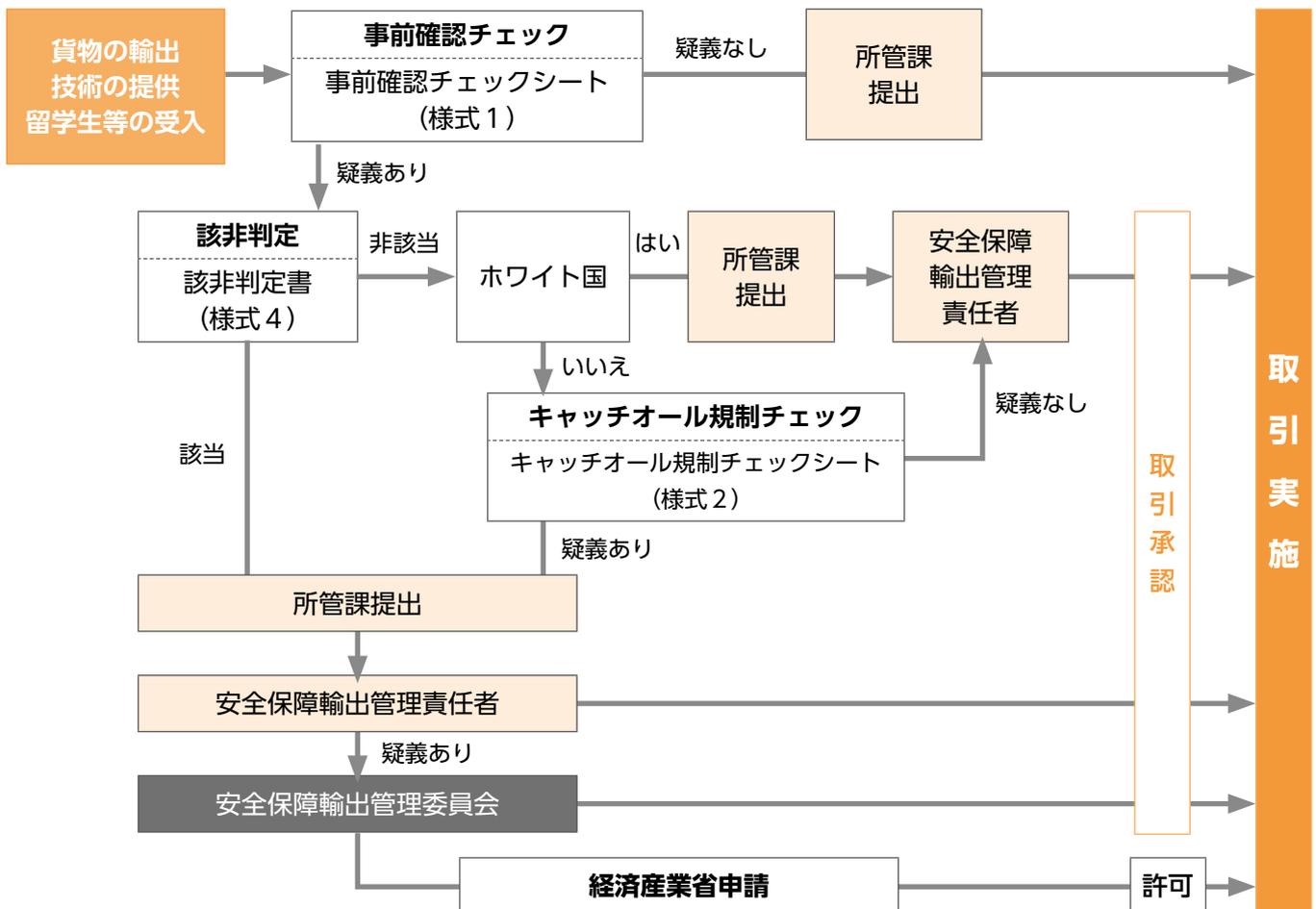
安全保障輸出管理統括責任者（医学部長）が、安全保障輸出管理最高責任者の指示に基づき、本学における輸出管理の業務を統括します。

また、輸出管理業務の適切な実施のため、安全保障輸出管理統括責任者のもとに、安全保障輸出管理責任者（国際交流センター次長）を置くとともに、国際交流センターを安全保障輸出管理事務局とします。



学内手続きの流れ

学内における安全保障輸出管理の手続きとして、取引を行う**教職員等各自**が事前確認チェックを行い、各様式を所管課に提出します。



※安全保障輸出管理規程、輸出管理の学内手続き様式類等は下記 URL よりダウンロードいただけます。

規程・様式等 <http://www.naramed-u.ac.jp/gakunai/soshiki/kokusaikoryu/anzenhoshoyushutsukanri.html> (学内限定)

お問い合わせ先：安全保障輸出管理事務局（国際交流センター）内線：2565

2019
3.1 ~

外国人医師の研修を行いました

放射線医学教室にて、2名の外国人医師を受け入れました。

●金泰煥（キム・テファン）先生

国民健康保険イルサン病院（National health insurance service ILSAN hospital・韓国 / 2019年3月1日から2020年2月23日）

キム先生は、1年間の滞在ということもあり、奥さまと9才の息子さんも同伴の来日でした。息子のカンミンくんは今井小學校に入学し、日本の子供たちとの生活も経験しました。奈良医大 IVR センターは高い技術力を持ち、研究にうちこめる、とてもよい環境であったとご本人も大変満足されていました。



送別会での様子（右側がキム先生）

●チン（Ching Charoenvisal）先生

チュラロンコン大学（Chulalongkorn University・タイ / 2019年11月4日から2020年1月24日）

チン先生は、田中利洋准教授の講演を聞き、奈良医大 IVR センターでの研修を希望されました。センターでは先端の技術・知識を得ることができたとおっしゃっていました。



医局のみなさんと（中央がチン先生）

お二人ともに、吉川教授をはじめとするスタッフの方々がとても親切だったと、本当に喜んでおられました。今後もこのような外国人医師や研究者の受入れの機会が増えていくことを願っています。

* 海外からの研究者、学生の滞在の感想は、国際交流センターの学内ホームページ（VOICE）に掲載しています。

11.30

近畿建築祭奈良大会でMBTの取組みをアピールしました

奈良春日野国際フォーラム葛において、市民公開イベント「第38回近畿建築祭奈良大会」が開催され、「建築 × MBT（医学を基礎とするまちづくり）」と題してMBT研究所の遊佐講師がMBTについて講演を行いました。

近畿建築祭奈良大会は、広く一般市民の方々に建築の魅力等を伝えるイベントであり、今回は様々な“まち”の在り方を探る回となりました。本学では、「医学を基礎とするまちづくり」構想を推進しており、急速に高齢化が進む社会において、医療とまちづくりの融合がいかにか重要かを講演しました。本学の「医療 × まちづくり」の挑戦について、参加された方々は興味深く聞いておられました。



MBT 研究所 遊佐講師の講演の様子

12.20

橿原ロータリークラブ講演会でMBTを講演しました

THE KASHIHARA（旧 橿原ロイヤルホテル）において、橿原ロータリークラブ講演会が開催され、「地域住民・企業とともにあゆむMBT（医学を基礎とするまちづくり）」と題してMBT研究所の遊佐講師がMBTについて講演を行いました。

MBTでは、生活支援・介護予防の観点からも地域貢献・社会貢献を行い、地元自治会と共同で「健康教室」等の開催を行っています。地域のまちづくりを進める上で、実質的に中心的組織となっている自治会との良好な関係の持続、行政が進める健康福祉政策にかかる各種取組とも連携することが重要であると講演しました。



MBT 研究所 遊佐講師の講演

2019
12.30～ **ドイツの学生（4名）の臨床
実習を行いました**

ドイツからの学生4名を、消化器・総合外科と胸部心臓血管外科で受け入れました。

〈消化器・総合外科〉

- アニカさん (Annika Majer・マルティンルター大学)
2019.12.30～2020.2.23
- メラニーさん (Melanie Girst・レーゲンスブルク大学)
2019.12.30～2020.2.23
- ピーターさん (Peter Werkmann・レーゲンスブルク大学)
2020.1.13～2020.3.8

〈胸部心臓血管外科〉

- ラムさん (Lam Thanh Ly・シャリテ大学)
2019.12.30～2020.3.20

実習は、関連医局の協力のもと、手術見学を中心に行われました。実習生の実習期間が重なっていたこともあり、4人での行動も多く、週末は近隣地域への観光に出かけ、また、本学の学生やスタッフだけでなく、地域の人々とも大いに交流を深めることができましたようです。コロナウイルスの影響により多少の制限はあったものの、思う存分に滞在を楽しんでいました。

今後も、このような奈良医大で実習を希望する外国人学生の受入れを積極的に行っていきたいと思っていますので、ご協力とご理解のほどよろしくお願いいたします。

* 海外からの研究者、学生の滞在の感想は、国際交流センターの学内ホームページ (VOICE) に掲載しています。



消化器・総合外科のみなさんと（前列左から2番目がピーターさん、前列右からアニカさん、メラニーさん）



手術室での見学



心臓血管外科医局にて（右列中央がラムさん）

1.11
1.12 **平城宮跡歴史公園スマートチャレンジ
シンポジウムでMBTを講演しました**

平城宮跡歴史公園で開催された「平城宮跡歴史公園スマートチャレンジシンポジウム」で、MBT研究所の梅田副所長が「エイジングタウン奈良の健康づくりとQOL向上」と題してMBT研究所の取組を紹介しました。

平城宮跡歴史公園スマートチャレンジとは、AIやIoTなどの新技術を活用し、公園の抱える課題の抜本的な解決や、公園利用者サービスの創出などによる一層の魅力向上などを実現するための取組であり、本シンポジウムではスマートチャレンジの参画事業者による実験紹介や有識者によるパネルディスカッションや講演が行われました。

MBTでは、予めからIoTによるバイタルデータ収集等の実証実験を行っており、講演では、実証実験の結果や社会実装への有用性等を報告しました。参加された方々は、興味深く耳を傾けられている様子でした。



MBT研究所 梅田副所長講演の様子

1.16 **柿の葉ずし総本家平宗奈良店で
MBTを講演しました**

MBT連携企業の一つである富士通のユーザー会が主催する地区セミナーでMBT研究所の梅田副所長が「動き出した、医学を基礎とするまちづくり」と題して講演を行いました。

会場は、柿の葉ずし総本家平宗ということもあり、柿の葉ずしの手づくり体験で会場の雰囲気や和んだところで、MBTについての講演と、異分野融合の場となりました。

講演では、急速に高齢化が進む中、さまざまな自治体で住民を支える「医療・健康・介護」のためのネットワーク構築、従来にない医学を基礎とする新たなまちづくりへの挑戦について講演され、参加された方々は興味をもたれていました。



柿の葉ずし総本家平宗奈良店での梅田副所長の講演

1.20

万博に向けてMBTの取組みについて

MBT 研究所では、MBT 研究や取り組みの統合調整を図るため、定例的に運営会議を開催しています。

今回は、主に大阪万博について議論を行いました。万博では「未来社会の実験場」として、2025年の万博会場等で実装あるいは実証する「未来社会」のアイデアの募集を行っており、その中に、MBT 研究所が進めるIoTを活用した近未来社会の遠隔医療実現に向けた取組を展開できることから、本提案に応募し、今後万博での取組に力を入れていきたいと考えています。



学長室での運営会議の様子

1.21

白檀生祭におけるチャリティ募金の寄附について

昨年10月に開催した本学白檀生祭での、子供の脳の発達等に関する講演会で、学園祭実行委員会がチャリティ募金を実施し、医学科同窓会からの追加支援金と併せて516,313円を奈良県に対して寄附されました。寄附贈呈式が1月21日に県庁知事室で行われ、学長や講演会を共催した医学科同窓会長立ち会いのもと、学園祭実行委員会の学生3名から、「発達障害に関する施策に活用ください。」と寄附目録が知事に手渡されました。



贈呈式の様子

1.24

北海道更別村でMBTの取組みをアピールしました

MBT 研究所では、MBT の全国展開として、北海道の自治体における医療機能の見直しプロセスとそれに連動する住民参加のまちづくりに関する調査研究事業に取り組んでいます。

今回その一環として、更別村の住民を対象として、健康とまちづくりをテーマとしたワークショップが開催されました。

日頃から健康づくりを意識し、生涯現役で自分らしく健康的に暮らせるよう「ウェアラブルウォッチを使った健康管理」と題し、MBT 研究所の梅田副所長が講演を行いました。

また参加者はウェアラブルウォッチの体験もし、MBT の研究成果を肌で感じることができました。



小学校でのMBTの講演



ウェアラブルウォッチ

1.28
2.12
2.20

安全保障輸出管理説明会を開催しました

1月28日、2月12日、2月20日の3日間、本学教職員等を対象に安全保障輸出管理説明会を開催しました。安全保障輸出管理とは、国際的な平和及び安全の維持を目的として、軍事転用可能な貨物及び技術を大量破壊兵器の開発等を行っている国やテロリスト等の手に渡ることを防ぐための管理制度であり、外国為替及び外国貿易法（外為法）に基づいて規制が行われています。

本学では、4月1日より、研究機材や物質の輸出、国際学会への参加、海外への論文投稿、外国からの研究生や学生の受入を行う等の際に手続きが必要となります。

説明会では、本学での手続き手順や提出用紙の記入方法を中心に、安全保障輸出管理の概要、過去の事例についての説明を行いました。毎回、多くの方が足を運び、熱心にメモを取りながら話に耳を傾けていました。

手続き方法等については、P20～P21に特集があります。また、学内ホームページにも掲載しております。



説明会の様子

2.6 FD・SD講演会を開催しました

女性研究者・医師支援センターは、教育開発センター・人事課と共催でFD・SD講演会を開催しました。

講師に奈良県福祉医療部こども・女性局女性活躍推進課の戸毛由樹子課長をお招きし、「奈良県の男女共同参画～データから見てきたもの～」と題してご講演いただきました。

固定的性別役割分担意識に賛成の割合や専業主婦率が全国1位であるなど、奈良県の男女共同参画の現状がクイズ形式で紹介され、講義後のアンケートでは「楽しく男女共同参画について勉強できた」「奈良県の状況がよく理解できた」といった感想が多くありました。

女性研究者・医師支援センターでは、長い年月をかけて積み上げる専門職としてのキャリア形成と職場以外の家庭や地域における労働の在り方について今後も皆さまと一緒に考えていきたいと思えます。



講演を行う戸毛課長



講演の様子

2.7 2.13 研究不正防止研修会を開催しました

研究者等に求められる倫理規範の習得を目的に、研究不正防止研修会を開催しました。ロバスト・ジャパン株式会社 吉田勝久氏を講師に、時代と共に変化する研究コンプライアンスのあり方について、様々な事例を交えながらお話いただきました。

この研修会は、「研究活動における不正行為への対応等に関するガイドライン（平成26年8月26日文科科学大臣決定）」及び「公立大学法人奈良県立医科大学における研究活動上の不正行為の防止等に関する規程」に基づき、毎年開催しています。



研修会の様子

2.6 テキサス大学ヘルスサンアントニオ校からバーマ教授、マカハラジー准教授が来学されました

アメリカのテキサス大学ヘルスサンアントニオ校(University of Texas Health San Antonio) から、バーマ (Sandeep Burma) 教授とマカハラジー (Bipasha Mukherjee) 准教授が来学されました。

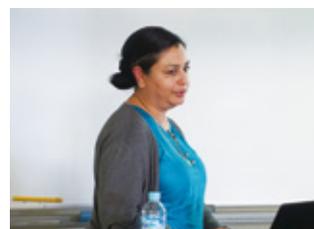
バーマ教授は、宇宙飛行士への健康被害という観点から放射線によって生じる脳腫瘍について研究されており、NASA 関連のプロジェクトに関わっておられます。マカハラジー准教授は、DNA 修復経路を標的とした放射線による脳腫瘍治療の研究を行われています。

医学科2年生対象の海外リサーチ・クラークシッププログラムでは、森准教授（未来基礎医学）のご紹介により、2019年度は二川真由さん（医学科3年生）を受け入れて頂きました。

学長表敬訪問に続く未来基礎医学主催の講演会では、バーマ教授が“Radiation-induced glioblastoma development and recurrence”、マカハラジー准教授が“Targeting DNA repair pathways for glioblastoma therapy”と題して、放射線誘導脳腫瘍形成と放射線による脳腫瘍治療法の開発に関する最新の研究内容について講演されました。



左より森准教授、マカハラジー准教授、バーマ教授、細井理事長・学長



特別講演会の様子

Campus News

2.9

第10回大和漢方医学薬学セミナーを開催しました

医師を対象に、「漢方診療～腹診を中心に～」と題し大和漢方医学薬学セミナーを本学で開催しました。

大和漢方医学薬学センター三谷和男特任教授が講師となり、泌尿器科学の鳥本学内講師の司会のもとに、第1部では、「四物湯の有用性を探る」と題して、舌診による血虚の正しい診断方法や、舌診の歴史、四物湯の有用性について講演を行いました。四物湯とは「血虚」に対する基本的な包剤とされています。

第2部の実技編では、参加者にタイプの異なる腹診シミュレーターに触れて頂き、腹診の仕方、鑑別、診断ノウハウの紹介をしました。総括・質疑ではより深く理解しようとする熱心な質問が相次ぎ、非常に有意義なセミナーとなりました。



三谷先生の講演



泌尿器科学の鳥本先生



腹診の実技

2.14

MBTで新型コロナウイルスへの取組を検討

MBT 研究所運営会議をタカトリラボで行いました。

新型コロナウイルスの感染が世界的に拡大しつつある状況を踏まえ、会議の中ではMBT 連携企業の全国薬局チェーンのデジタルサイネージにより、本学の医学的知見による感染防御知識の普及を行う方向で議論しました。MBTは、多種多様な活動により社会に貢献していきたいと考えています。



タカトリラボでの運営会議の様子

2.18

次世代住宅シンポジウムでMBTを講演しました

国土交通省「サステナブル建築物等先導事業(次世代住宅型)」の一環として、東京でシンポジウム「事業者連携から生まれるIoT次世代住宅」が開催され、奈良医大発ベンチャー企業のMBTリンクの代表でもあるMBT研究所 梅田副所長が、「医学を基礎とするまちづくり」について講演を行いました。今後、医学をベースにした取り組みを展開させながら、少子高齢社会を快適に暮らせるまちづくりや、医学的知見やノウハウを投入した産業創生・地方創生を図っていきます。会場には、300名を超える聴衆者が講演に耳を傾けました。



MBT 研究所 梅田副所長の講演

2.19

同志社女子大学と共催でロビーコンサートを開催しました

本学と同志社女子大学とは、教育・研究に関する相互支援などを目的として、学術交流に関する包括協定を締結しています。

交流の一環として、附属病院北玄関ロビーにおいて同志社女子大学の学生による院内コンサートを開催しました。今回は、ヴォーカルアンサンブルコンサートを行い、手拍子によるアンコールも出るなど入院患者の皆様にご大盛況でした。演奏する学生のみならず、聴く方も学びの成果を発表するという貴重な体験の場となりました。



コンサートの様子

2.19

今井町にてMBT健康教室を開催しています

MBT研究所では、2018年8月より今井地区自治会と共同で、「健康教室」を開催しています。2月19日に令和元年度の最後の開催がありました。健康教室では、座位による体操を、休憩を挟んで40分程度行うほか、体操前後にはストレスチェック等も行い、今までに延べ約250人が参加されました。健康教室に参加することで、外出機会や近所づきあいが増え、運動習慣が身についたとされる参加者の方の意見を頂いています。

健康教室は、今井町の地域包括ケアシステムのハブとなり、地域レベルでの運動不足の解消、閉じこもりがちな独居世帯の孤立を防止する等、地域コミュニティに深く入り込み、地域に貢献してきました。

MBTは地元とも歩調を合わせながら、着実に取組を展開していきます。



健康教室の様子

2.20

北海道沼田町でMBT健康モニター報告会を行いました

MBT研究所が取り組む、MBTの全国展開として、2019年10月～2020年1月の3カ月間にわたり、北海道沼田町で地域づくりの課題に取り組む健康モニター実証実験（参加した町民の食事や睡眠、日々の生活行動についてスマートフォンを利用して、健康状態を数値化する実験）を行い、その報告会を2月20日に行いました。

この実証実験は、MBT研究所の梅田副所長が担当し、今後の新しい健康サービスの展開に利用するというので、実験の参加者は「3カ月間大変だったが、楽しかった。」と感想を述べていました。

MBTは、今後も積極的に展開を図っていきます。



北海道沼田町での報告会の様子

2.21

MBTによる看護・介護の負担軽減に向けた実証実験を開始

医療・介護現場では、患者が寝たきりなどで皮膚に炎症が生じる褥瘡（じょくそう）予防のために、看護・介護者による高頻度の体位変換が必要で、身体的負担が大きく、経験に頼る部分も多いため論理的対応も難しく業務上の課題となっています。

脳神経内科学 杉江教授とMBT連携企業がこの課題を解決するべく、本学にて実証実験を開始しました。ベッドにかかる荷重の度合いから患者の状態を把握できる3次元センシングを活用し、本学がこれまで培ってきた褥瘡予防のノウハウを可視化。これにより医療・介護現場における看護・介護者の負担軽減や人手不足を解消することを目指します。



加重センサーのプロトタイプ

2.28

日本国際博覧会協会小林上席審議役がMBT研究所を訪問されました

医学の正しい知識を産業創生、さらには、その成果を近未来社会のまちづくりまで発展させるMBT研究の視察のため、日本国際博覧会協会の小林上席審議役が来学されました。

MBT研究所長である細井理事長・学長が、MBTの研究成果を説明した後、MBT事業の一環である本学集中治療室のEMC（Effective Medical Creation：患者さんのストレス軽減のための取組）の見学をされました。万博にも広がるMBTの取組にご参加をお待ちしております。



集中治療室内の疑似窓

2.27 V-iCliniX 講座国際シンポジウムを開催しました



国際電気通信基礎技術研究所 (ATR) ロビーにて



開会挨拶を行う佐藤教授

2月27日と28日の両日にわたり、国際電気通信基礎技術研究所 (ATR) において「The 1st International Symposium on Human InformatiX」と題した国際シンポジウムを開催しました。

このシンポジウムは、V-CliniX 講座のめざす、医工計測・数理情報と臨床医学に精通するマルチリンガル研究者を地球規模で考え、地域社会・経済に貢献するグローバル人材の育成をめざす一環として行われました。



2部座長の森准教授

国内外よりシステムバイオロジー、バイオインフォマティクス、機械学習の分野で活躍するトップレベルの研究者を演者として招聘

するとともに、この分野における女性研究者の活性化を促進することをめざしました。

初日の第1部では、メルボルン大学のマイケル・スタンプ教授の「Can we Trust Large Computer Models of Biological Systems」と題した基調講演から始まり、関連分野の最先端の研究について発表が続きました。

第2部では本学未来基礎医学の森准教授が座長を務められ、レイデン大学のローランド・メルクス教授の基調講演をはじめとし、国立研究開発法人医薬基盤研究所や統計数理研究所の先生方の講演が続き、議論を交わされました。

国際シンポジウムということもあり、講演者は全員英語での講演でしたが、質疑応答でも活発に意見交換がされていました。

また、初日に行われたポスターセッションは、一般より公募されたため、各分野の若手研究者が発表し、交流の深まるよい機会となりました。



会場の様子

3.3

附属病院ボランティア発足 20周年記念式典

3月3日にボランティア発足20周年記念の感謝状贈呈式典を挙行了しました。

今回受賞のボランティア団体さんは、「ラポール」と「院内学級」でした。

ラポールは外来でエプロンを付けて活動されている団体で、患者さんと病院をつなぐ架け橋として平成12年3月に会員21名で発足しました。現在は34名が午前8時半から午後3時の間活動していただいています。

活動内容は玄関での挨拶、新患者さんの受付案内、再診受付機操作の手伝い、医療器具を付けていない車椅子患者さんの移送、ボランティア図書の管理、モニター送信機袋等の縫製活動等多岐にわたっています。

34名のうち、ラポール発足当時からメンバーは3名、10周年からは13名と長く活動されている方々が多くおられます。

また、ラポールの活動時間が500時間・2000時間・3000時間の節目には病院から、1000時間には日本ボランティア協会が感謝状を贈呈しています。今まで500時間達成者は39名、1000時間は28名、2000時間は12名、3000時間は1名と多くの方に多くの時間、ご協力をいただきました。

院内学級は、小学校・中学校の教員免許や保育士の資格を持った12名の方が活動しておられます。教員免許を持ったボランティアさんに入院中の子どもさんの勉強を見ていただいたり、移動図書や、病棟で本の読み聞かせを毎週してもらったりしています。

ボランティアさんを募集中です。お知り合いの方にお声掛けをよろしくお願ひします。ご興味のある方がおられましたら、病院管理課 総務係までご連絡お願ひします。



式典の様子



ボランティアさんと職員一同

3.9

和歌山県立医科大学と知的財産に 関する意見交換会を行いました

本学は和歌山県立医科大学とともに、特許庁支援事業「知財戦略デザイナー派遣事業」に採択され、特許庁の知財戦略デザイナーからアドバイスを受けることができました。

同じデザイナーが派遣されたこともあり、デザイナーを交えての和歌山県立医科大学と本学による知的財産に関する意見交換会を実施しました。特許出願に関するお互いの抱えている課題や、情報共有等を行い、今後も交流を深めると共に、意見をもとに本学にフィードバックできるよう努めます。



意見交換会の様子

3.13

本学知的財産戦略の 意見交換会を開催しました

昨年10月から6ヶ月の間、アドバイスをいただいた特許庁の知財戦略デザイナーより活動報告や本学における今後の課題について、細井理事長・学長を交えて議論しました。

デザイナーからは、「研究者との対話の中で、手続き面でのサポートを期待する声が多くあった」とお話しされ、知財戦略のアドバイスや技術移転のサポートを推進する支援部署(人材)の設置を進めることや、大学の知財戦略に関する研究者への啓発活動への提案がありました。



意見交換会の様子

3.13 知的財産勉強会を開催しました

臨床研修棟1階カンファレンス室で、知的財産勉強会を開催しました。特許庁の知財戦略デザイナーが講師となり「大学における知的財産活動」と題して講演いただきました。

大学における知財活動の意義、特許制度について、経験談を踏まえた知財管理の取り組みなどのご紹介がありました。講演後の質疑についても現場での実例など実態に沿った質問も多く有意義な勉強会となりました。



勉強会の様子

3.18 奈良先端大との共同研究助成事業成果報告会を開催しました

奈良先端大との連携活性化を目的に、令和元年度より共同での大型資金の獲得を目的に協定大学共同研究助成事業が創設されました。

令和元年度採択された課題について、中間報告となる進捗状況報告会を開催しました。

「心筋疾患に対するAIを用いた自動病理診断システムと非侵襲的検査法からの病理像予測システムの開発」

循環器内科学 講師 尾上 健児

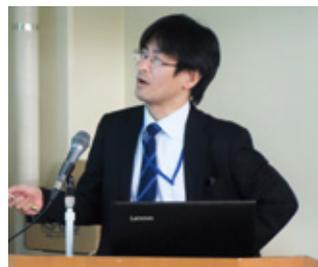
「1細胞遺伝子発現と細胞形態の深層学習による統合解析」

発生・再生医学 教授 栗本 一基

当日は、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、無観客での開催でしたが、審査員の先生方から、次々に鋭い質問もあり今後の研究に期待が持たれました。



循環器内科学 尾上先生



発生・再生医学 栗本先生

3.24 健康長寿大規模コホート研究進捗状況報告会の開催

本学では、将来像の重点研究2016推進計画に定める重点研究課題の1つとして、健康長寿大規模コホート研究の推進を行い、地域住民の健康意識高揚等を目的とした地域貢献を図っています。このたび、以下の研究課題について進捗状況報告会を開催しました。



循環器内科学 齋藤 教授

「奈良県における循環器医療の質の向上と循環器病地域包括ケア構築に資する実態調査」

循環器内科学 教授 齋藤 能彦

3.25 大阪西梅田のMBTサテライト拠点の展開について

MBT研究所運営会議を学長室会議室で開催し、今後も続く新型コロナウイルスへの対策としてテレビ会議の重要性が増すとの認識から、梅田先生については、WEBを用いたテレビ会議の中で議論に参加しました。

会議では、過去に本学と企業が共同開発したプレハブ型発熱外来診療室の活用検討や大阪西梅田のMBTサテライト拠点での活動報告がありました。梅田先生からは、大阪西梅田のグリーゼタワー3階にあるMBTサテライト拠点での活動状況、来場者にMBTが開発したウェアラブル端末で自身のバイタル計測や環境計測データを基にした、健康やストレス緩和に関わるアドバイスを受けられるような様々なサービスの展開をモニターを通して説明を受けました。



テレビ会議による運営会議の様子

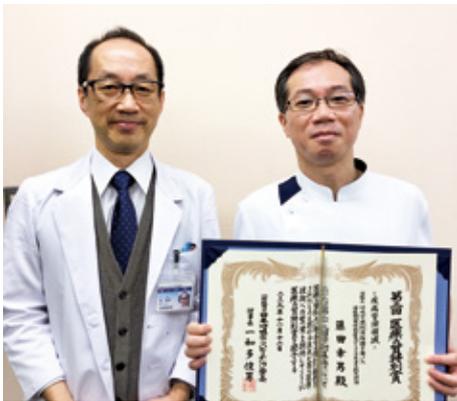
Winner Report

11.11
~12

第29回日本呼吸ケアリハビリテーション学会で医療の質特別賞－疾病管理領域－を受賞しました

呼吸器内科学 助教 藤田 幸男

この度、11月11日～12日に開催されました第29回日本呼吸ケアリハビリテーション学会において、「呼吸不規則性指標を用いた慢性閉塞性肺疾患（COPD患者の病態評価）」が、医療の質特別賞－疾病管理領域－を受賞しました。呼吸のリズムを客観的に評価した呼吸不規則性指標が、COPDの新たな評価法になり得ることを報告した臨床研究です。今回の受賞を励みとして、今後も臨床研究に励む所存です。本研究にあたり御指導を賜りました室繁郎教授、ならびにご指導・ご協力頂きました多くの先生方に深く御礼申し上げます。

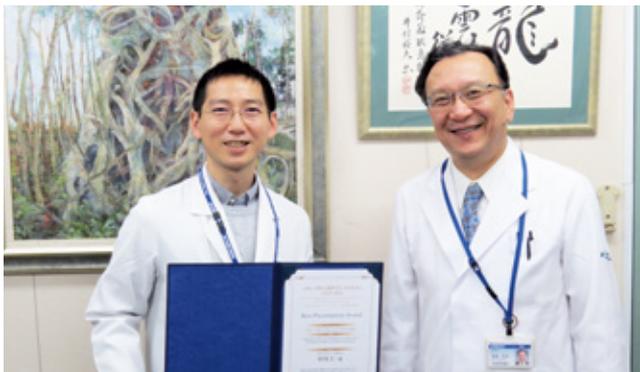


12.14

第36回国際心臓研究学会日本部会でBest Presentation Awardを受賞しました

循環器内科学 助教 中川 仁

ナトリウム利尿ペプチドの作用を増強する新しい心不全薬（ネプリライシンを阻害）が日本でも近く承認されます。本発表は心臓に対するネプリライシンの作用についての研究であり、遺伝子改変動物作製から学会発表まで5年経りましたが、こうして受賞することができほっとしております。御指導いただいた齋藤教授、尾上先生をはじめ、実験の遂行を強力に手伝ってくださった吉岡さん、井岡さん、坂井田さん、足立さんにこの場をおかりしてお礼を申し上げたいと思います。



12.21

第226回日本内科学会近畿地方会で医学生奨励賞（優秀演題賞）を受賞しました

医学科6年（脳神経内科学）大橋 孝太郎

12月21日に大阪市で開催された第226回日本内科学会近畿地方会における学生セッション（口演発表）で、本学医学科6年生の大橋孝太郎君が優秀演題賞を受賞しました。本学脳神経内科での臨床実習で経験した症例をもとに、「呼吸不全を契機に診断に至ったネマリンミオパチーの1例」と題して、見事な発表と的確な質疑を披露しました。医学生にとっては、将来医師として診療および研究をしていく上で立派な成果を収められ、今後の活躍が大いに期待されます。



12.21

日本内科学会近畿地方会で医学生奨励賞を受賞しました

医学科6年（循環器内科学）田中 俊志

内科学会の近畿地方会にて症例発表をさせていただきました。初めての症例発表で、まとめるのに非常に苦戦しましたが、無事まとめ上げることができ、得難い経験を積むことができました。

このような機会を与えてくださいました、齋藤教授、中川先生、直接何度もスライドを直していただき、いちから指導くださった金岡先生、予演で指導いただいた添田先生はじめ指導いただきましたすべての先生方に深く感謝いたします。



Winner Report

12.21

第226回日本内科学会近畿地方会で若手奨励賞(優秀演題賞)を受賞しました

脳神経内科学 後期研修医 山中 愛

12月21日に大阪市で開催された第226回日本内科学会近畿地方会における若手奨励賞セッション(口演発表)で、本学脳神経内科学講座の山中 愛後期研修医が50題以上の中から選ばれ、優秀演題賞を受賞しました。演題「舌偏倚を契機に診断に至った舌下神経管周囲の頭蓋底びまん性大細胞性B細胞リンパ腫の1例」は、当科と脳神経外科、病理診断学との共同研究による成果であり、頭蓋底病変における脳神経症状の診断・治療および病態機序を考慮する上で貴重な症例検討でした。本学会の若手奨励賞は、審査委員20名による厳正な選考により授与されたものです。若手医師にとっては今後の内科学診療および研究の大きな励みとなり、今後さらに研究の発展に貢献してくれるものと考えます。



学報編集委員会からのお知らせ

寄稿記事募集案内

「学報」では、奈良県立医科大学や附属病院に関すること、お知らせ等を掲載するため、これらに関連する記事を広く募集しております。掲載を希望する記事がある場合は内線2206までお問い合わせください。

なお「学報」は年4回発行しており、本学教職員・学生のみならず本学同窓会会員や関連大学・病院等にも配布しております。



12.23

東京生化学研究会 2019年度研究助成を受賞しました

未来基礎医学 助教 菊池 壮太郎

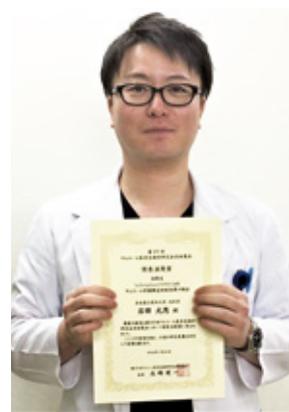
この度、「アセチル化を介したコヒーシンの代謝機構の解析」を研究テーマとして、2019年度東京生化学研究会研究奨励金(150万円)を受賞しました。本研究課題は染色体分体の接着に関わるコヒーシンの翻訳後修飾の構造基盤を明らかにすることを目指しています。このような賞を受賞できたのも、多くの方々のご指導・ご支援のおかげと大変感謝しております。今後とも、基礎研究に邁進し、人々の生活を豊かにするための一助となるよう、日々取り組んでまいります。

1.24
~ 25

第39回アルコール医学生物研究会学術集会におきまして優秀演題賞を受賞しました

消化器内科学 医員 石田 光志

この度、1月24日、25日に東京で開催された第39回アルコール医学生物研究会学術集会におきまして優秀演題賞を受賞しました。受賞演題は「Sulforaphaneによるアルコール肝線維症抑制効果の検討」です。アルコールによる肝線維化は酸化ストレスや自然免疫など様々な機序が関与しているとされ、その治療は禁酒のみでは十分な効果を得ることは困難であり、薬物治療の確立は重要な課題と考えられています。ブロッコリースプラウトであるSulforaphaneはNrf2活性作用を持つとされ、それ以外にも様々な作用を有することが知られており、今回、Sulforaphaneのアルコール肝線維症抑制効果およびその機序を検討しました。本研究にあたり、吉治教授をはじめ、消化器内科学講座の諸先生方より多くのご指導とご支援をいただきました。厚く御礼申し上げます。また、本受賞を励みに今後の研究、日常診療において、なお一層精進していきたいと思っております。



3.2

サノフィ株式会社グローバル公募 式大型研究助成を獲得しました

呼吸器内科学 准教授 山内 基雄

このたび当教室の准教授山内基雄が医師主導臨床研究『睡眠関連呼吸障害疑い症例に潜在する遅発型ポンペ病スクリーニング(PSSAP-J Study)』をサノフィ株式会社グローバル臨床研究審査に投稿し見事大型研究助成(総額 4,500 万円 (2 年間)) を獲得することができました。



本研究は 7 つの大学病院を含む 11 施設が参画する多施設共同臨床研究であり、希少疾患である筋疾患、とりわけポンペ病が、睡眠呼吸障害が疑われる患者群に多く潜在することを明らかにする研究です。夜間の呼吸に注目することで、新たな病態の発見や潜在する疾患の早期発見に繋がる非常に有意義な研究であると考えています。

様々な疾患に伴う呼吸障害は日中覚醒中のみならず夜間にも生じること、そしてそれを高いレベルで呼吸管理することは呼吸器内科医にとって重要なタスクの一つです。本研究が機となり、夜間日中を問わず呼吸管理の重要性が再認識され、呼吸管理分野が一層発展していくことを切に願っています。

(教授 室 繁郎)

3.4

令和元年度 FD 活動表彰式を 行いました

令和元年度は全 8 回の FD が開催されました。令和元年度 FD 活動の表彰については、医学教育フォーラム(テーマ: 本学において基礎、臨床の垂直統合はどこまで可能か?)において提出されたレポートにより、本学にとって有意義であり、非常に充実した意見を発表いただいた方を対象といたしました。結果、教養教育: 森英一朗准教授(未来基礎医学) 基礎医学: 廣中安佐子准教授(生化学) 臨床医学: 上村秀樹教授(先天性心疾患センター) が表彰されました。



3.4

令和元年度 TBL Best Teacher 表彰式を行いました

本学では、双方向性授業の導入のための教育手法として以前より TBL (Team Based Learning) を導入してきました。令和元年度に行われた基礎医学 I (医学科 2 年生)、基礎医学 II (医学科 3 年生)、臨床医学 (医学科 5 年生) における TBL の学生アンケートにて「一番興味を持った TBL」に選ばれた担当教員が Best Teacher として表彰されました。

基礎医学 I TBL Best Teacher 生化学 助教 牧野 舞
基礎医学 II TBL Best Teacher 発生・再生医学 教授 栗本 一基
臨床医学 TBL Best Teacher 放射線医学 講師 伊藤 高広
循環器内科学 助教 中川 仁



3.11

上原記念生命科学財団 2019 年度 研究奨励金を受賞しました

未来基礎医学 助教 菊池 壮太郎

この度、「減数分裂に関わる HORMAD1 の構造生物学的研究」を研究テーマとして、2019 年度上原記念生命科学財団研究奨励金 (200 万円) を受賞しました。このような賞をいただき大変光栄です。本研究課題は、減数分裂期における軸形成の機構を構造生物学的に明らかにすることを目指しており、染色体分配の機能に迫っていけたらと思います。本受賞を励みとし、今後も研究に邁進してまいります。これまでご指導いただきました多くの皆様に厚く御礼申し上げます。



Winner Report

2019年度 学位授与の状況

博士 (医学)

次の64名に博士 (医学) の学位が授与されました。
(甲は「主科目」を、乙は「所属」を表しています。)

本審査日 2019年6月11日 (火) 13名

(甲)	福岡 靖史	画像診断・低侵襲治療学
	佐藤 健司	画像診断・低侵襲治療学
	益田 尚典	視覚統合医学
	今田 光彦	口腔・顎顔面機能制御医学
	田中 祥貴	脳神経機能制御医学
	黒川 紘章	運動器再建医学
	林 修一郎	公衆衛生学
	西口 由希子	分子腫瘍病理学
	村上 敏春	脳神経機能制御医学
	尾本 幸治	脳神経機能制御医学
	中上 純子	糖尿病学
(乙)	古川 晶子	小児科学
	下村 忠弘	口腔外科学

本審査日 2019年9月10日 (火) 15名

(甲)	山下 泰徳	精神医学行動神経科学
	辻井 信之	発達・成育医学
	西和田 忠	侵襲制御・生体管理医学
	才川 宗一郎	消化器病態・内分泌機能制御医学
	中村 泰士	口腔・顎顔面機能制御医学
(乙)	森田 剛平	病理診断学
	関 建一郎	内科学第三
	森岡 佐知子	産婦人科学
	山田 有紀	産婦人科学
	伊東 史学	産婦人科学
	小池 奈月	産婦人科学
	菊井 祥二	脳神経内科学
	土田 親次	生化学
	朴 憲秀	脳神経外科学
	早川 正樹	輸血部

本審査日 2019年11月12日 (火) 14名

(甲)	石原 卓	発達・成育医学
	内山 智子	病理診断学
	栗田 博仁	糖尿病学
	北村 哲郎	運動器再建医学
	江川 琢也	運動器再建医学
	増田 佳亮	運動器再建医学
(乙)	吉澤 弘行	小児科学
	浦谷 光裕	精神医学
	正田 哲也	放射線医学
	明珍 薫	放射線医学
	Gurung Pritam	脳神経外科学
	安川 元章	胸部・心臓血管外科学
	佐々木 義之	消化器・総合外科学
	和田 誠	整形外科学

本審査日 2020年3月5日 (火) 22名

(甲)	西岡 祐一	公衆衛生学
	森 拓也	分子腫瘍病理学
	鈴木 由希	微生物学
	石原 里美	循環器病態制御医学
	久保 卓也	消化器病態・代謝機能制御医学
	下里 直隆	消化器病態・代謝機能制御医学
	中西 啓祐	消化器病態・代謝機能制御医学
	大西 健太	泌尿器病態機能制御医学
	飯田 孝太	泌尿器病態機能制御医学
	伊藤 妙子	耳鼻咽喉・頭頸部機能制御医学
	阪上 雅治	耳鼻咽喉・頭頸部機能制御医学
	大野 史郎	総合臨床病態学
	高橋 佑佳	口腔・顎顔面機能制御医学
	酒井 和哉	血液・血流機能再建医学
(乙)	小松 雅代	疫学・予防医学
	中出 裕士	消化器・総合外科学
	杉本 正	脳神経外科学
	赤坂 珠理晃	産婦人科学
	新納 恵美子	産婦人科学
	岩井 加奈	産婦人科学
	福井 真二	泌尿器科学
	吉川 高宏	輸血部

奈良県立医科大学大学院博士課程研究奨励賞

甲の学位論文申請者のうち主科目指導教員が推薦した者の中から医学の研究に最も優れた論文の申請者
酒井 和哉 血液・血流機能再建医学

修士 (医科学)

次の10名に修士 (医科学) の学位が授与されました。

畠中 利英	口腔・顎顔面機能制御医学
浅田 淳	侵襲制御・生体管理医学
安藤 さつき	脳神経機能制御医学
楠井 敏之	医療経営学
葛和 剛	先端画像下治療開発応用学
辻 洋文	呼吸器病態制御医学
中野 夏海	分子・細胞動態学
前原 健吾	先端画像下治療開発応用学
山口 直子	発生・発達医学
山本 和輝	循環・呼吸機能制御医学

修士 (看護学)

次の11名に修士 (看護学) の学位が授与されました。

岸本 麻美	看護学コース論文コース (成人看護学)
笹井 佐和子	看護学コース論文コース (公衆衛生看護学)
野中 雄太	看護学コース論文コース (高齢者看護学)
濱本 真理子	看護学コース論文コース (成人看護学)
後山 穂乃香	助産学実践コース (女性健康・助産学)
竹田 紗弥子	助産学実践コース (女性健康・助産学)
西浦 知晶	助産学実践コース (女性健康・助産学)
石原 泉	助産学実践コース (女性健康・助産学)
岡田 萌子	助産学実践コース (女性健康・助産学)
岡本 直子	看護学コース高度実践コース (周麻酔期看護学)
佐藤 真理子	看護学コース高度実践コース (周麻酔期看護学)

協定大学共同研究助成事業 助成者決定

本学と包括協定を締結している奈良先端科学技術大学院大学との連携研究活動の一層の活性化を推進するため、昨年度より協定大学共同研究助成事業を実施しています。

令和2年度協定大学共同研究助成事業の奈良医大分の助成者は下記の2名に決定いたしました。

所属	職名	氏名	研究課題名	共同研究者（奈良先端科学技術大学院大学）
解剖学第一	教授	西 真弓	新規行動解析システムによる幼少期生育環境が脳および行動に及ぼす影響と責任脳領域の検討	数理情報学研究室 教授 池田 和司
放射線医学	講師	西尾福 英之	ロボット化された生検保持器とCTの連携によるIVRロボット	ロボティクス研究室 准教授 高松 淳

インフォメーション

Information

令和2年度入試結果

		募集人員	志願者数 (A)	受験者数	合格者数 (B)	追加合格者数 (Bの内数)	入学者数	志願倍率 (A/B)	前年度倍率
医学科	推薦（緊急医師確保）	13	123	116	13	0	13	9.5	9.7
	推薦（地域枠）	25	149	147	25	0	25	6.0	6.8
	前期	22	163	138	22	0	22	7.4	9.3
	後期	53	968	298	64	11	53	15.1	12.5
	編入学（研究医枠）	1	2	1	1	0	1	2.0	4.0
	編入学	1	24	24	1	0	0	0.0	0
	小計	115	1,429	724	126	11	114	11.3	10.5
看護学科	推薦（地域枠）	35	68	68	35	0	35	1.9	1.9
	前期（一般枠）	40	97	94	42	2	40	2.3	3.1
	前期（地域枠）	10	44	43	10	0	10	4.4	3.4
	小計	85	209	205	87	2	85	2.4	2.6
医学部	合計	200	1,638	929	213	13	199	7.7	7.3

The donation person name

寄附者ご芳名

「未来への飛躍基金」にご協力いただきありがとうございました

基金創設以来、令和2年3月までに累計2,915件のご寄附をいただいております。

なお、今号では、令和2年2月～令和2年3月にお申し込みいただいた方のご芳名を掲載させていただきます。

【個人】

◆100万円以上

國分 清和 様

◆10万円未満

掲載を希望されないご寄附者様 1名

【法人・企業等】

◆1,000万円以上

医療法人 南風会 理事長 南 尚希 様

◆10万円未満

奈良医大昭和45年卒業生有志 様

奈良県立医科大学医学部医学科

平成6年～11年卒業 合同同窓会参加者一同 様

掲載を希望されないご寄附者様 1団体

(五十音順)

ご寄附いただいた方のご芳名については、本学「未来への飛躍」基金HP (<http://www.narmed-u.ac.jp/~hiyakukikin/>) に掲載しております。

Media Listing Information

メディア掲載情報をお寄せください～学報紙面で紹介します～

新聞・雑誌・テレビ等マスコミの取材、テレビ出演、記事を掲載された教職員・学生をこの「学報」紙面で紹介します。

	日付	媒体	対象者	掲載概要
2019年	12月7日	奈良新聞	消化器内科学 教 授 吉治 仁志	知って治そうC型肝炎
2020年	1月5日	読売新聞	MBT 研究所 副 所 長 梅田 智宏	IoTの技術を活用した住民の健康管理システムがネット上で実用化に向けて動き出した。
	1月14日	日経BP	MBT 研究所 副 所 長 梅田 智宏	奈良医大発ベンチャー MBTリンクが放つ健康管理サービスについて。
	1月18日	産経新聞	麻酔科学 教 授 川口 昌彦	「疑似窓」やイラストで医療機器の威圧感を緩和、ICU彩り患者に安らぎストレスを軽減。患者の免疫カアップにつなげるのが狙いだ。
	1月26日	読売新聞	整形外科科学 教 授 田中 康仁	「病院の実力」スポーツ障害(肩・足・腰)足指ほくし予防に有効
	1月26日	産経新聞	産婦人科学 教 授 小林 浩	くらしと医学公開講座開催について
	1月28日	読売新聞	学園祭実行委員	学園祭における募金等の寄附。発達障害児支援に活用を。
	1月28日	読売新聞	感染管理室 室 長 笠原 敬	新型コロナウイルスによる肺炎の対応について
	1月30日	NHK 奈良「JAPA-NAVI」	整形外科科学 教 授 田中 康仁	雪駄の健康影響について
	1月30日	DtoD コンシェルジュ「私たちの流儀」	医師・患者関係学講座 教 授 石井 均	長年の診療経験を生かし、新講座「医師・患者関係学」に打ち込む
	2月1日	読売新聞	感染管理室 室 長 笠原 敬	新型コロナウイルスによる肺炎の対応について
	2月2日	読売新聞	産婦人科学 教 授 小林 浩	くらしと医学公開講座開催について
	2月9日	奈良テレビ「県政フラッシュ」		
	2月18日	奈良新聞	弘済会	奈良医大イメージキャラクターしょうとくた医師くんグッズ販売
	2月27日	関西テレビ「報道ランナー」	脳神経外科 病院教授 朴 永鉄	乳児頭部外傷に関して、専門的な立場からコメント
	3月5日	読売KODOMO新聞	公衆衛生学 教 授 今村 知明	新型肺炎の感染リスクについてコメント
	3月10日	奈良テレビ「ゆうドキッ!」	感染管理室 室 長 笠原 敬	専門家に聞く新型コロナウイルス感染症の予防について
	3月15日	奈良テレビ「県政フラッシュ」		
3月21日	奈良テレビスポーツ特別番組	脳神経内科 教 授 杉江 和馬	難病と闘いながら競技に取り組むアーチェリー日本代表選手の診察の様子とコメント	
3月25日	奈良新聞		奈良県立医科大学で進む障害者雇用のへの取り組み	
4月6日	奈良新聞	理事長・学長 細井 裕司	世界でも類にないMBTの取り組みが新型コロナウイルスの撲滅をめざす	

編集後記

新型コロナウイルス感染症が世界で広がっています。本号では、新型コロナウイルスの状況を踏まえた本学・附属病院の取り組みの一部を紹介しています。刻一刻と状況が変わっておりますが、皆様の一層のご理解・ご協力を賜りますようお願いいたします。

